財団法人八尾市文化財調査研究会報告112

Ⅰ　大竹西遺跡　（第５次調査）
Ⅱ　木の本遺跡　（第14次調査）
Ⅲ　木の本遺跡　（第15次調査）
Ⅳ　山賀遺跡　（第13次調査）
Ⅴ　弓削遺跡　（第７次調査）

2008年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人八尾市文化財調査研究会報告112

Ⅰ　大竹西遺跡　（第５次調査）
Ⅱ　木の本遺跡　（第14次調査）
Ⅲ　木の本遺跡　（第15次調査）
Ⅳ　山賀遺跡　（第13次調査）
Ⅴ　弓削遺跡　（第７次調査）

2008年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央部にあり、東に大阪府と奈良県の境を画する生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域であり、古くから生活が営まれた地域であります。このため、この河内平野には数多くの遺跡が存在し、私たちの祖先が残した貴重な文化財が数多く埋蔵されています。これらのかけがえのない文化財を開発による消滅から守り、後世に永く伝承させることが現在に生きる我々の大きな責務と認識しております。

そこで私共では、こうした消滅の危機にさらされている埋蔵文化財を、一つでも多く後世に伝えるため、事業者のご理解とご協力をいただきつつ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第であります。

このたび、平成18・19年度に実施しました公共下水道事業に伴う発掘調査の整理が完了し、報告書として刊行することになりました。

本報告では、弥生時代後期の鉄剣が出土して話題を呼んだ大竹西遺跡、弥生時代前～中期の環濠集落が見つかっている山賀遺跡などを調査し、その周辺の様相を窺い知ることができました。

本書が地域史解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成20年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　岩　﨑　健　二

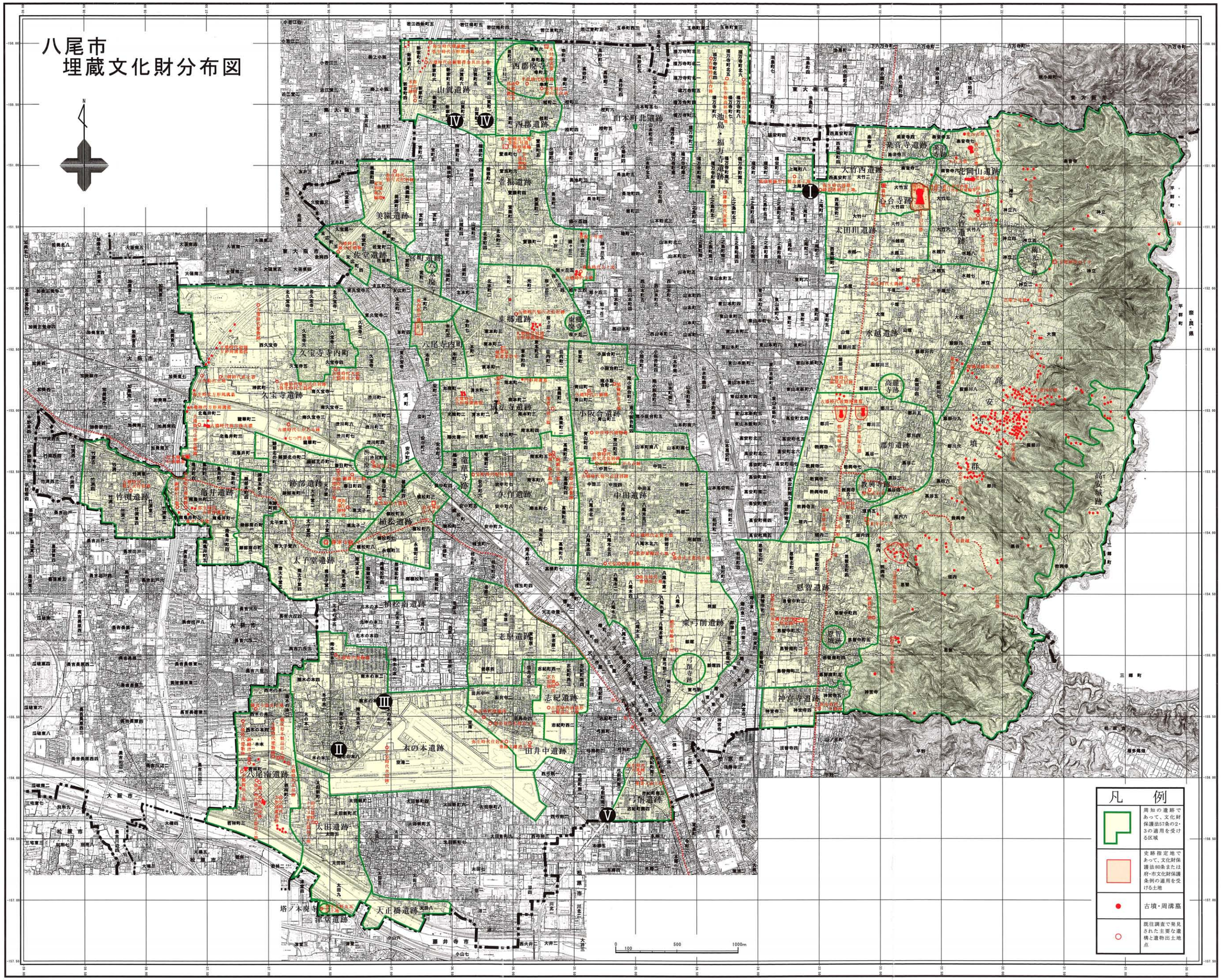
序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成18・19年度に実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成20年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ・Ⅱ成海佳子、Ⅲ・Ⅴ荒川和哉、Ⅳ西村公助、荒川で、全体の構成・編集は西村が行った。
1．本書に掲載した地図は、八尾市教育委員会発行の16000分の１の八尾市埋蔵文化財分布図－平成19年度版－、八尾市発行の2,500分の１地形図(平成８年７月編纂)を使用した。
1．本書で用いた標高はすべてT.P.(東京湾平均海面)＋値(m)である。
1．本書で用いた方位は磁北及び座標北(国土座標第Ⅵ系)を示す。
1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器―白、須恵器―黒、
1．土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編1989『新版標準土色帖９版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を用いた。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　大竹西遺跡　第５次調査(ＯＴＮ2007－５)……1
Ⅱ　木の本遺跡　第14次調査(ＳＫ2006－14)……9
Ⅲ　木の本遺跡　第15次調査(ＳＫ2006－15)……13
Ⅳ　山賀遺跡　第13次調査(ＹＭＧ2007－13)……17
Ⅴ　弓削遺跡　第７次調査(ＹＧＥ2007－７)……25
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図



Ⅰ　大竹西遺跡第５次調査（ＯＴＮ2007－５）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市上尾町七丁目地内で実施した公共下水道工事(平成18年度恩智川東排水区第38工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する大竹西遺跡第５次調査（ＯＴＮ2007－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成19年６月12日から８月７日（実働５日）にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約44㎡である。

1．現地調査においては、市森千恵子・中村百合・中浜輝志・鷹羽侑太の参加を得た。

1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成19年８月27日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、主に成海が行ったが、写真図版は鷹羽が作成した。

本　文　目　次

1．はじめに……1

2．調査概要……2

　1）調査の方法と経過……2

　2）層序……2

　3）検出遺構と出土遺物……2

3．まとめ……4

Ⅰ　大竹西遺跡第５次調査（ＯＴＮ2007－５）

１．はじめに

大竹西遺跡は、八尾市北東部の上尾町七・八丁目、西高安町三・四丁目、大竹二・五丁目、楽音寺二丁目に所在し、生駒山地西麓に形成された扇状地の先端部に位置する。周辺には、北に楽音寺遺跡・北東に花岡山遺跡・東に大竹遺跡・南に太田川遺跡が接し、西側には池島・福万寺遺跡がある。また、東側の生駒山地西麓にかけては、楽音寺跡や古代寺院跡である心合寺跡や古墳時代中期の中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳をはじめとして西の山古墳・花岡山古墳・向山古墳などが位置しており、さらに山側には、古墳時代後期の群集墳である高安古墳群が位置する。

当遺跡は、平成元(1989)年、大阪市環境事業局八尾工場建替えに先立つ試掘調査の際、縄文時代～古墳時代に至る遺物包含層が確認されたことで周知された。この試掘調査の結果から、平成２（1990）年度に、当研究会が工場・煙突部分を対象として、第１次調査を行なった（原田他2007)。続く平成３（1991）年度には、第１次調査地の北隣で、衛生処理場更新工事に伴う第２次調査を行なった(高萩1992)。次いで平成８（1996）年度には、第１次調査地の東100m地点で、市立屋内プール建設に伴う第３次調査を行なった(西村他1997)。さらに平成11(1999)年度には、第３次調査地の北300m地点で、公共下水道工事に伴う第４次調査を行なっている(樋口2001)。

これらの調査の結果、当地では、弥生時代前期～古墳時代中期にかけての居住域・墓域・生産域の変遷が明らかにされた。なかでも、弥生時代後期から奈良時代にかけては、安定した住環境か連続していたことが指摘されている。また、第１次調査で出土した古墳時代前期の瑪瑙製鏃形石製品や、第３次調査で出土した弥生時代後期の鋳造鉄剣は、当該時期の生活を知る上で重要な意味を持つものと考えられる。また、第４次調査で出土した縄文時代の貝化石は、当該時期の自然環境を知る上で重要な資料と言える(図１・表１参照)。

表１　周辺の調査地一覧

調査名	調査期間	調査面積	調査原因	検出遺構・出土遺物	文献
第１次調査 0TN1900-1	19900601 ～ 19910731	9000㎡	大阪市環境事業局八尾工場建替	弥生前期－墓域、弥生中期－水田・河川・堰、弥生後期－井戸・土坑・小穴、古墳前期－居住域/瑪瑙製鏃形石製品、奈良～平安－土坑・小穴、鎌倉～近世－生産域	原田他 2007
第２次調査 0TN1991-2	19911202 ～ 19920131	671㎡	八尾市立衛生処理場更新	弥生中期前半－水田、弥生中期末－水田、古墳－土坑、鎌倉－溝、室町－水田	高萩 1992
第３次調査 0TN1996-3	19960819 ～ 19960331	2000㎡	八尾市立屋内プール建設	弥生前期（3.3～3.6m）－河川、弥生後期初頭－土坑・小穴・溝・河川・鉄剣、弥生後期前半－溝、古墳中期－土坑・小穴・溝、平安末～鎌倉－水田	西村他 1997
第４次調査 0TN1999-4	19991104 ～ 19991221	91㎡	公共下水道工事	縄文前期－貝化石、縄文後期～晩期－水成層、弥生前～中期－河川、弥生後期－遺構、時期不明－遺構	樋口 2001
第５次調査 0TN2007-5	20070612 ～ 20070907	44.3㎡	公共下水道工事	今回報告	

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市上尾町七丁目地内で行われた公共下水道工事(18－38工区)に伴うもので、当研究会が大竹西遺跡内で実施した第５次調査(ＯＴＮ2007－５)である。調査区の位置は、第１次調査地・第３次調査地の南に面する道路部分で、第３次調査地から南西約50m地点に位置する。調査区は鋼矢板で囲まれた約7.2m四方の発進立坑で、南半分は道路下にあたるため、覆工板で覆われている。

工事による掘削深度は現地表下７ｍ（T.P.＋0.2）前後までで、工程は現地表下１ｍと４ｍ前後に土留めのＨ鋼が２段設置され、その間に配管工事が行なわれるというものである。

調査は、１段目のＨ鋼設置後(現地表下２ｍ前後まで掘削終了)から開始した。調査は工程優先で工事に併行して行なったため、２段目のＨ鋼設置・配管工事が終了する段階の現地表下3.6m（T.P.＋3.5m）前後を境に、調査期間は２期に分かれた。前半は平成19年６月12・13・18日の３日間、後半は８月６・７日の２日間である。掘削については、機械・人力併用とし、遺構・遺物の検出に努め、平面図・断面図作成、写真撮影等の記録保存を適宜行なった。地層観察用のセクションは、当初北側に残したが崩落したため、掘削最終深度まで連続して南側に残した。

２）層序

現地表の標高は、T.P.＋7.2m前後である。現地表下2.2～2.5mまでは、旧耕土と盛土の混ざった地層が及んでいた。それ以下、現地表下７ｍまでで１～24層の地層を確認した。

１～３層は礫混粘土質シルトを主体とするもので、３層には攪拌が見られる。中～近世の作土の可能性がある。４～10層は河川埋土で、３つに大別できる。４・５層は細粒砂～中粒砂、６～９は粘土質シルトと極細粒砂・粗粒砂の互層、10層は粗粒砂～礫からなる。11～13層は湿地性の堆積土で、粘性の強い粘土質シルトである。11層はいわゆる「黒色帯」、12・13層には極細粒砂・礫が混入する。14・15層は流水堆積土で、粘土質シルトを主体とし、15層には植物遺体のラミナが見られる。16・17層は極細粒砂混粘土質シルトで、植物遺体を多く含む沼沢地状の堆積土である。18～22層は流水堆積土で、粘土質シルト・砂質シルト・極細粒砂などの薄い互層からなる。18層上面は土壌化する。23・24層は粘性の極めて強い粘土質シルトで、植物遺体を極めて多量に含む湿地性の堆積土である。

３）検出遺構と出土遺物

24枚の地層のうち、川底である11・16・23層上面ほか、黒色帯直下の12・18層上面で遺構検出を試みたが、遺構は検出できなかった。遺物は、11層上面精査中、弥生時代中期頃と思われる土器片が１点のみ出土した。

１～３層は中～近世の作土で、西側の第１次調査地では、鎌倉～室町時代の洪水砂に覆われた水田が、東側の第３次調査地では平安～鎌倉時代の水田が検出されていることから、この時期に対応するものと考えられる。４～10層からなる河川は、弥生土器片が出土したことや、第１次調査地・第３次調査地でも弥生時代中～後期の河川が数条検出されていることから、この時期のものと考えることができる。

11層については、第３次調査地で確認された最下の黒色土層が放射線炭素同位体の測定値から縄文晩期の堆積層「第１黒色帯」と確定されており、この層が11層とほぼ同レベルに堆積している

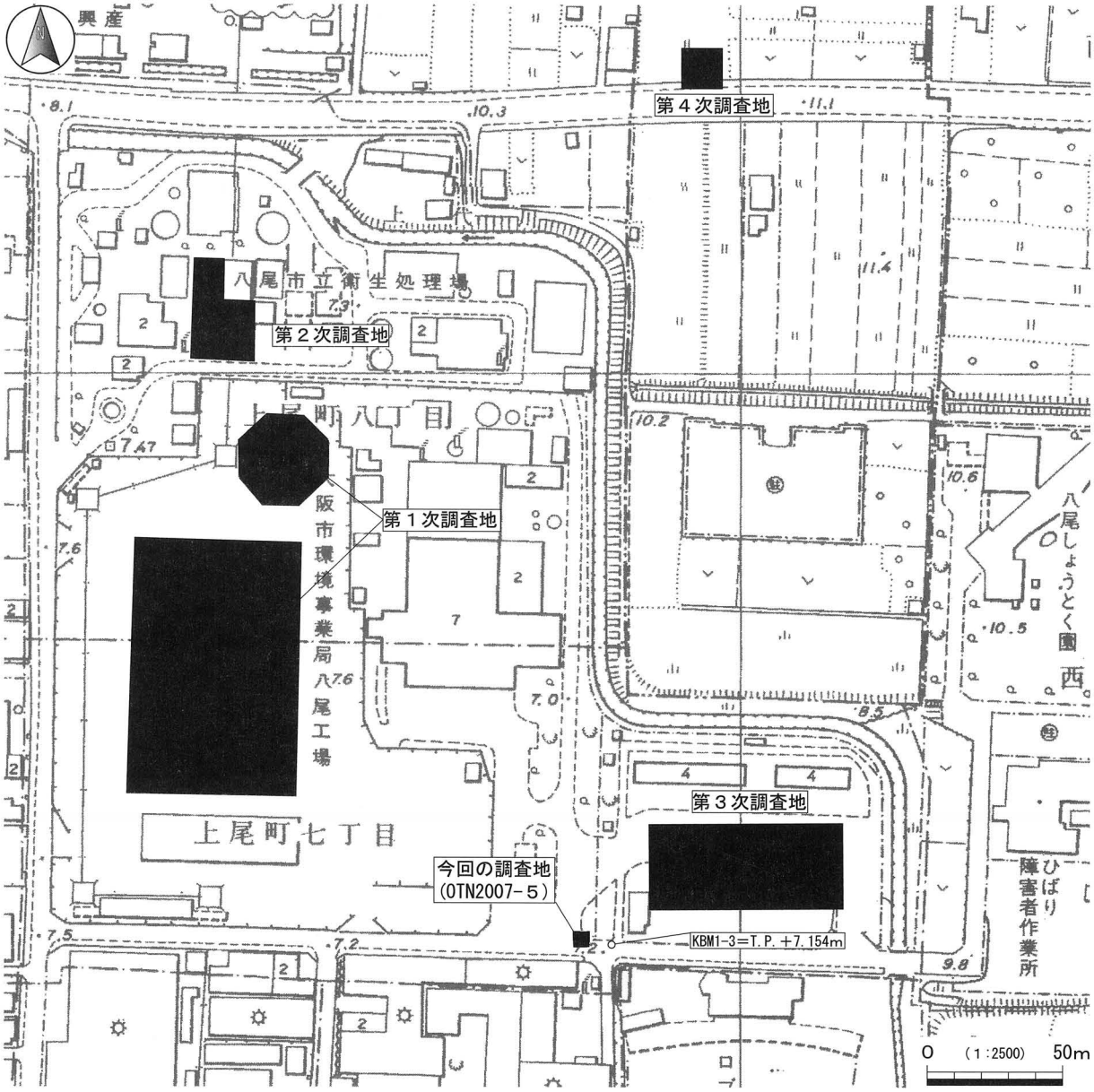


図１　調査地周辺図

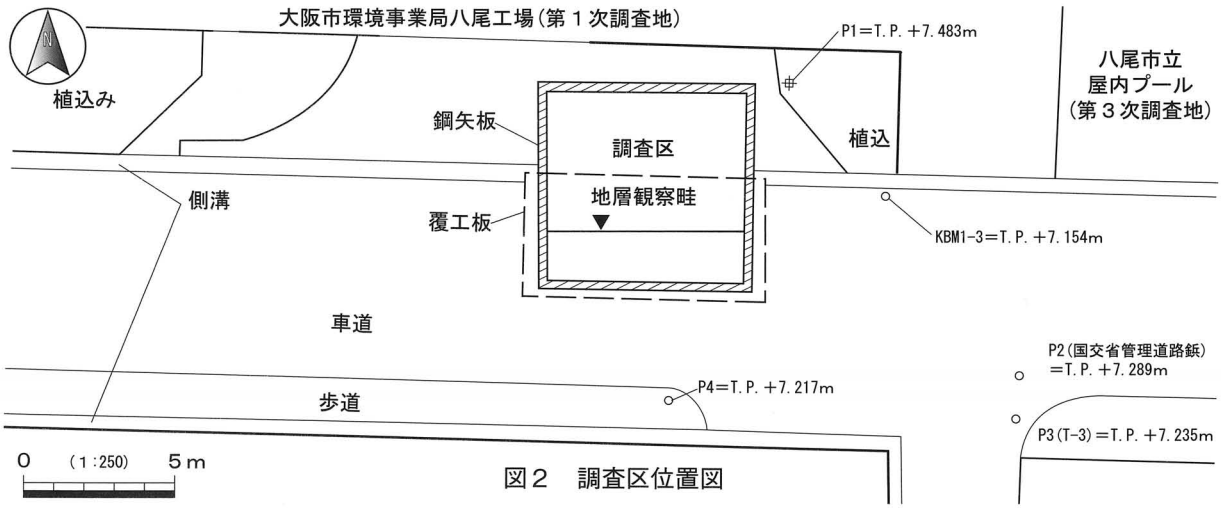


図２　調査区位置図

ことから、同一のものと断定できる。11層が「第１黒色帯」であれば、17層は「第２黒色帯」に、24層は「第３黒色帯」に対応する。18層は上面が土壌化していることから、ここに縄文時代晩期の生活面がある可能性も否定できない。

３．まとめ

今回の調査区は小面積ではあったが、下水道工事の立坑掘削に伴うものであったため、図らずも深層部の地層確認ができ、大きな成果が得られたといえる。

既往調査からも明らかにされているように、当地の自然環境が弥生時代後期を境として、大きく異なっていることが証明された。弥生時代後期以降奈良時代までは比較的安定した環境の下で活発な生活が展開しており、平安時代(後半か？)以降近年までは、農地として利用され続けてきたようである。一方、弥生時代後期以前は、多くの河川が流れ、流水・滞水を幾度も繰り返し、その間隙をぬって居住域・生産域・墓域が形成されるという集落の変遷が見られる。11層「第１黒色帯」は縄文時代晩期の堆積層で、第１次調査地でもほぼ同レベルに黒色土が堆積していることから、「黒色帯」が広範囲にわたって堆積していることが確認できた。以下の第２・第３黒色帯は縄文時代後～晩期の堆積層と考えられ、当時が湿潤な自然環境であったことが窺える。

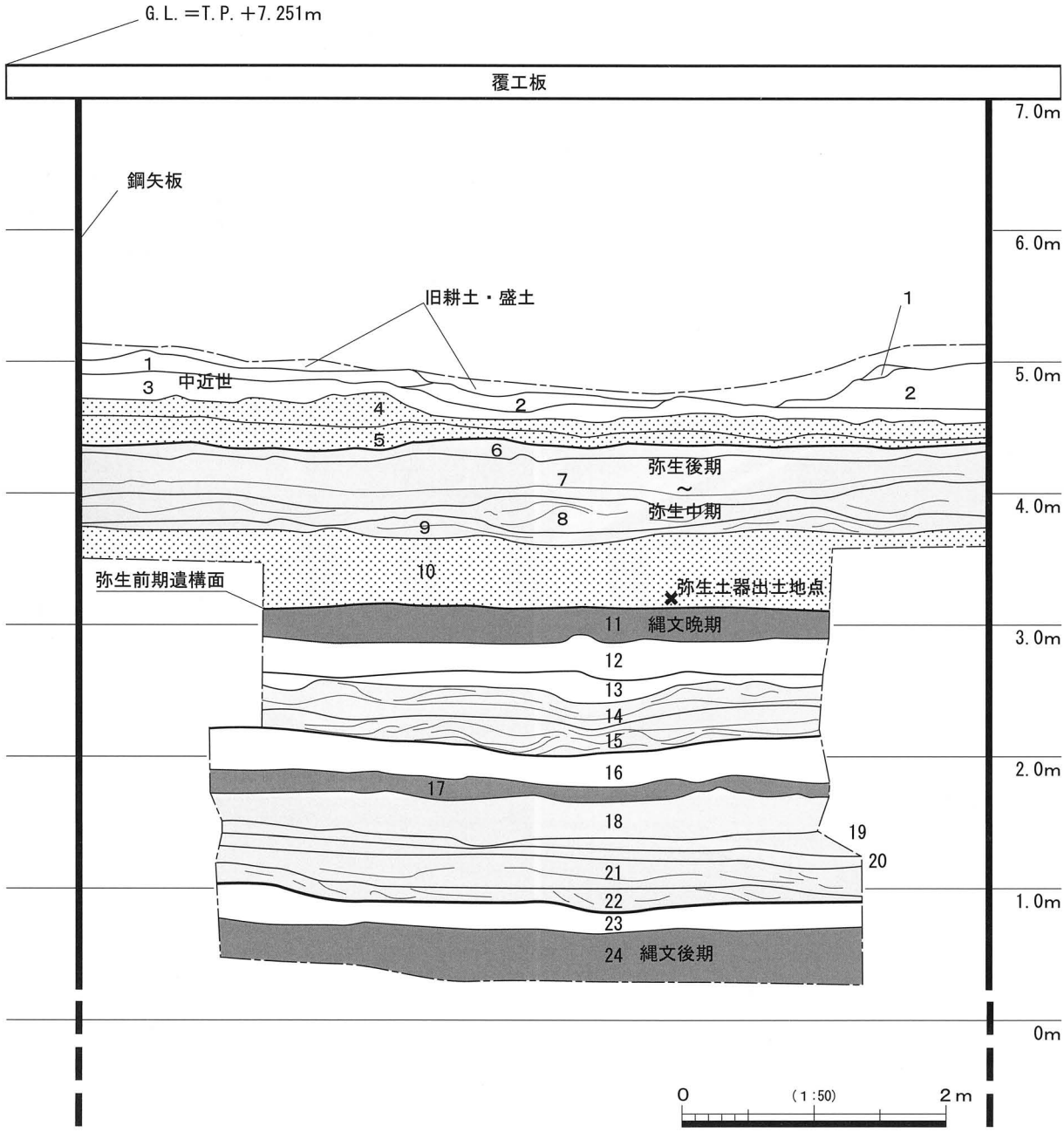
参考文献

・原田昌則・荒川和哉他　2007『大竹西遺跡(第１次調査)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告94　(財)八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1992「Ｘ　大竹西遺跡第２次調査（OTN91－２）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告34』(財) 八尾市文化財調査研究会報告34　(財)八尾市文化財調査研究会

・西村公助・樋口　薫　2008『大竹西遺跡』　第３次調査　－八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告－財団法人八尾市文化財調査研究会報告106　(財)八尾市文化財調査研究会

・樋口　薫　2001「Ⅳ　大竹西遺跡第４次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会

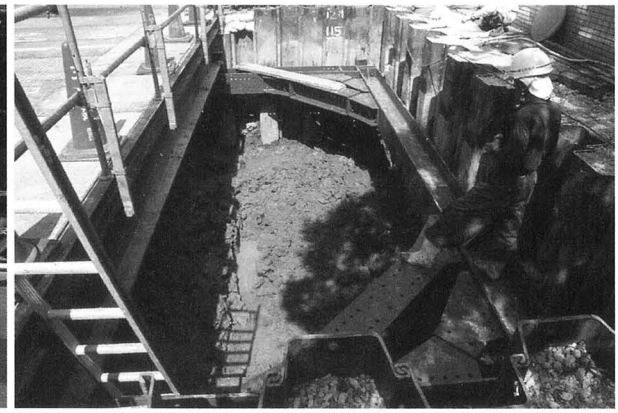


1　暗灰褐色礫混粘土質シルト
2　褐色礫混粘土質シルト
3　黄～灰褐色極細粒砂に１のブロック
4　灰黄色細粒砂
5　灰色細～中粒砂
6　黄褐色砂質シルト
7　暗灰色粘土質シルト・灰色極細粒砂の互層
8　灰色粘土質シルト・白灰色粗粒砂の互層
9　暗灰色粘土質シルト・青灰色極細粒砂の互層
10　白灰色粗粒砂～礫
11　黒灰色粘土質シルト－第１黒色帯
12　青灰色礫（極少量）混粘土質シルト
13　灰色極細粒砂（少量）混粘土質シルト
14　灰色粘土質シルト・白灰色極細粒砂の互層
15　褐色粘土質シルト・灰色粘土質シルト・植物遺体の互層
16　褐色極細粒砂混粘土質シルト（植物遺体含む）
17　黒褐色極細粒砂混粘土質シルト（植物遺体含む）－第２黒色帯
18　白灰色粘土質シルト～砂質シルト～極細粒砂の互層－上面土壌化
19　灰色粘土質シルト
20　黒灰色粘土質シルト
21　灰色粘土質シルト混極細粒砂
22　灰色極細粒砂混粘土質シルト
23　灰黒色粘土質シルト（植物遺体含む）
24　黒灰粘土質シルト（植物遺体極多量に含む）－第３黒色帯

図３　断面図

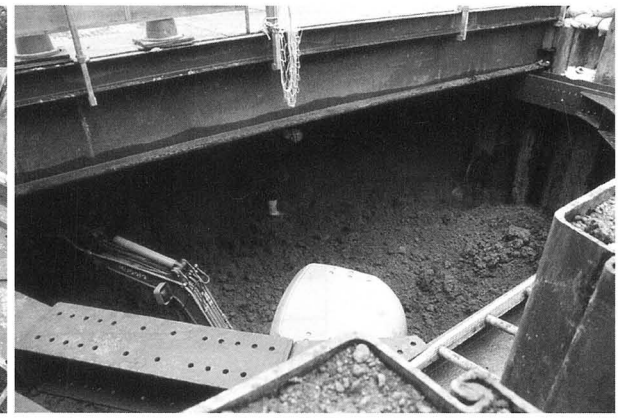
図版一

調査地全景（南東から）



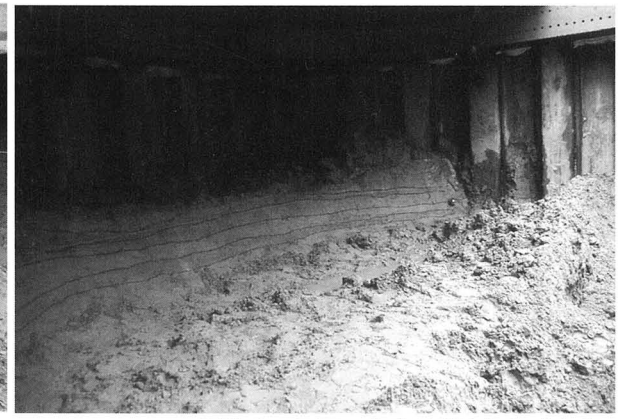
調査前の状況（東から）

北壁崩落状況（南東から）

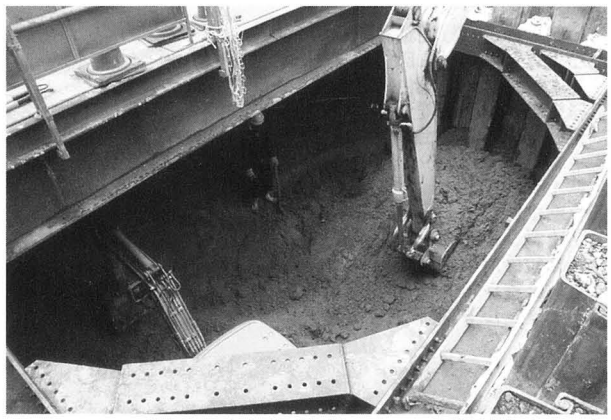


調査区南部掘削状況－１～７層（北東から）

南壁実測（北から）



南壁１～７層－水糸の高さT. P. ＋4. 5m



調査区南部掘削状況－７～10層（北東から）

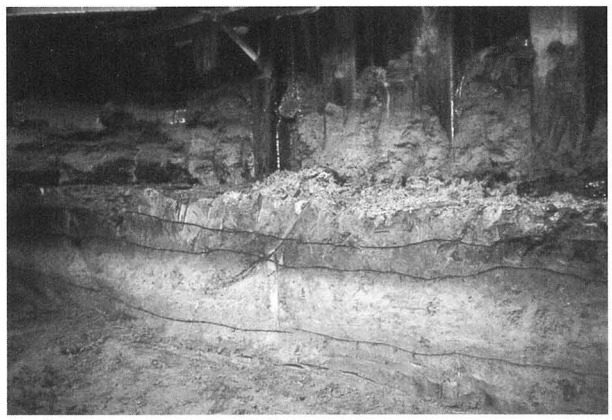
西部１～10層－水糸の高さT. P. ＋4. 5m

11層上面の状況（北西から）

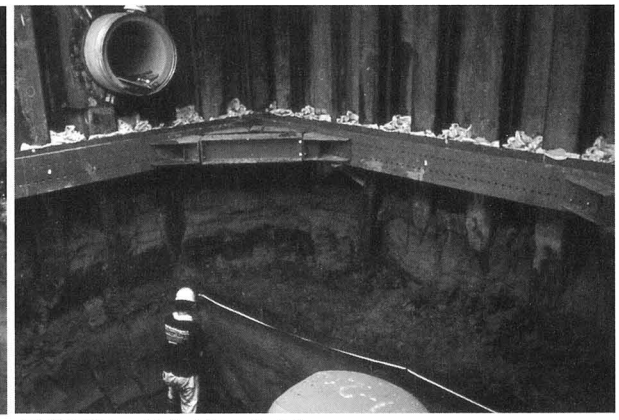
11層掘削・12層上面精査（北東から）

南壁11～15層－水糸の高さT.P.＋3.0m

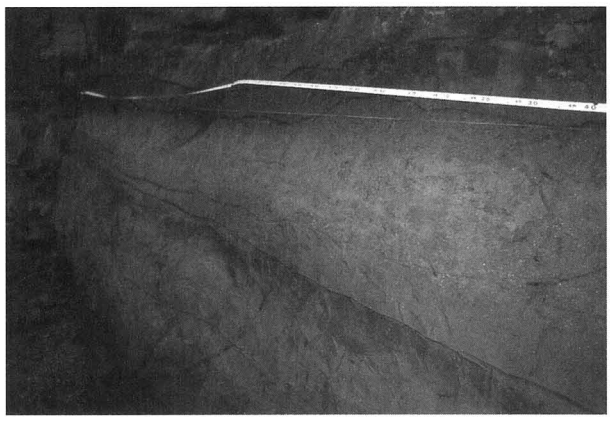
南壁15～18層精査の状況（北西から）



南壁16～19層－T.P.＋2.0m以下



最終掘削・精査（北西から）



南壁16～24層－水糸の高さT.P.＋1.7m

南壁実測（南西から）

Ⅱ　木の本遺跡第14次調査（ＳＫ2006－14）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市木の本一丁目、南木の本七丁目地内で実施した公共下水道工事（平成18年度飛行場北排水区第30工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する木の本遺跡第14次調査（ＳＫ2006－14）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成19年１月25日から１月31日（実働２日）にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約23㎡である。

1．現地調査においては、青山　洋・飯塚直世・鷹羽侑太の参加を得た。

1．本書作成に関わる業務は、成海が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……9

2．調査概要……10

　1）調査の方法と経過……10

　2）層序……10

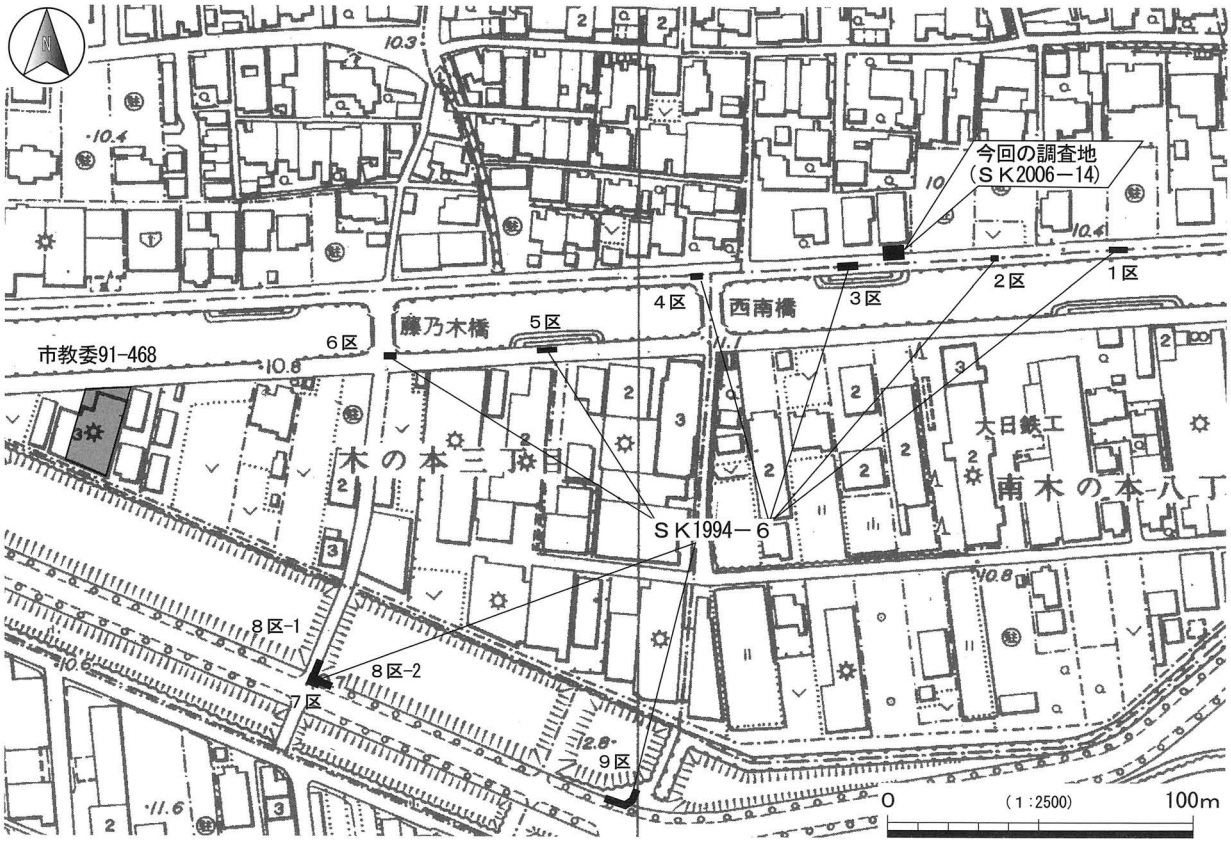
3．まとめ……10

Ⅱ　木の本遺跡第14次調査（ＳＫ2006－14）

１．はじめに

木の本遺跡は、八尾市の南西部に位置し、八尾空港とその西側一帯の東西約2.0km、南北約1.3kmの範囲に広がる弥生時代前期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市木の本一～三丁目、南木の本二～九丁目、空港一丁目がその範囲に含まれる。地理的には、河内平野の南西部にあたり、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置する。同様の条件で、当遺跡の東側には志紀遺跡・田井中遺跡・老原遺跡が、北～西には太子堂遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡が連なって位置している。一方、南～西に隣接する八尾南遺跡・太田遺跡は、羽曳野台地の先端に位置しており、地理的な条件は異なっているといえる。

当遺跡発見の契機となったのは、昭和56(1981)年に実施した八尾市南木の本４丁目での試掘調査で、弥生時代中期・古墳時代中期の遺構が検出されている(原田他1983)。その後、昭和57(1982)年度からは、おもに八尾空港内での大規模な調査が行われ、平安時代に遡る条里水田（原田他



調査名	調査期間	調査面積	調査原因	検出遺構・出土遺物	文献
1991-468	19920113・19920303	6.25㎡	工場建設	古墳後期－土坑・溝・水田・須恵器・埴輪	渚 1993
第6次調査 SK1994-06	19940303～19940711	71㎡	地下ケーブル埋設	近世以前－河川１・溝１	西村 1996

図１　調査地周辺図

1984）が検出されている。さらに空港の北側を区画する昭和沢の川（八尾空港北濠）や遺跡北部の平野川改修工事などに伴う発掘調査も実施されており、東部～中央部では弥生時代前期、北部・西部では古墳時代中期の遺構が検出されている（藤沢他1999　岩瀬他1999　藤田2001）。

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市木の本一丁目・南木の本七丁目地内で行なわれた公共下水道工事（18－30工区）に伴うもので、当調査研究会が木の本遺跡で実施した第14次調査（ＳＫ2006－14）である。調査区は、昭和56年度調査地から南へ500mの地点、昭和沢の川（空港北濠）北岸の道路部分で、西南西200mに市教委91-468調査地があり、東約40mには第６次調査地（以下６次と呼ぶ）－２区が、西20mには６次－３区が位置する（図１・表１参照）。

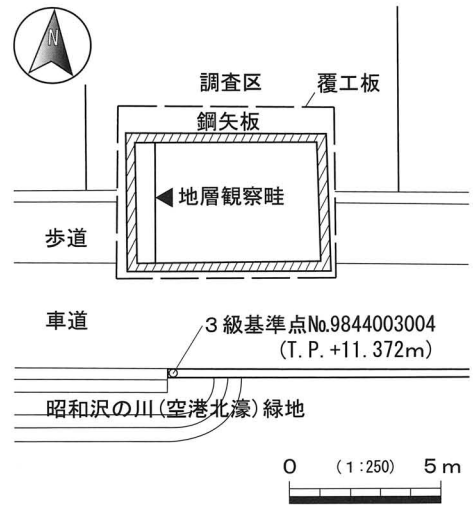


図２　調査区位置図

調査区は鋼矢板で囲まれた東西6.15m・南北3.75mの発進立坑で、掘削深度は現地表下4.7（T.P.＋6.1）m前後までで、工程は現地表下１m・3.75mに土留めのためのＨ鋼が２段設置されるものである。調査で使用した標高は、調査区南の３級基準点（T.P.＋11.372m）を使用した。

調査は、現地表下２m前後以下、１段目のＨ鋼設置後から行なった。掘削に際しては、現地表下２～５m前後まで、遺構・遺物の有無を確認しながら、機械・人力を併用しておこなった。地層観察用の畦は調査区西端に残した。調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

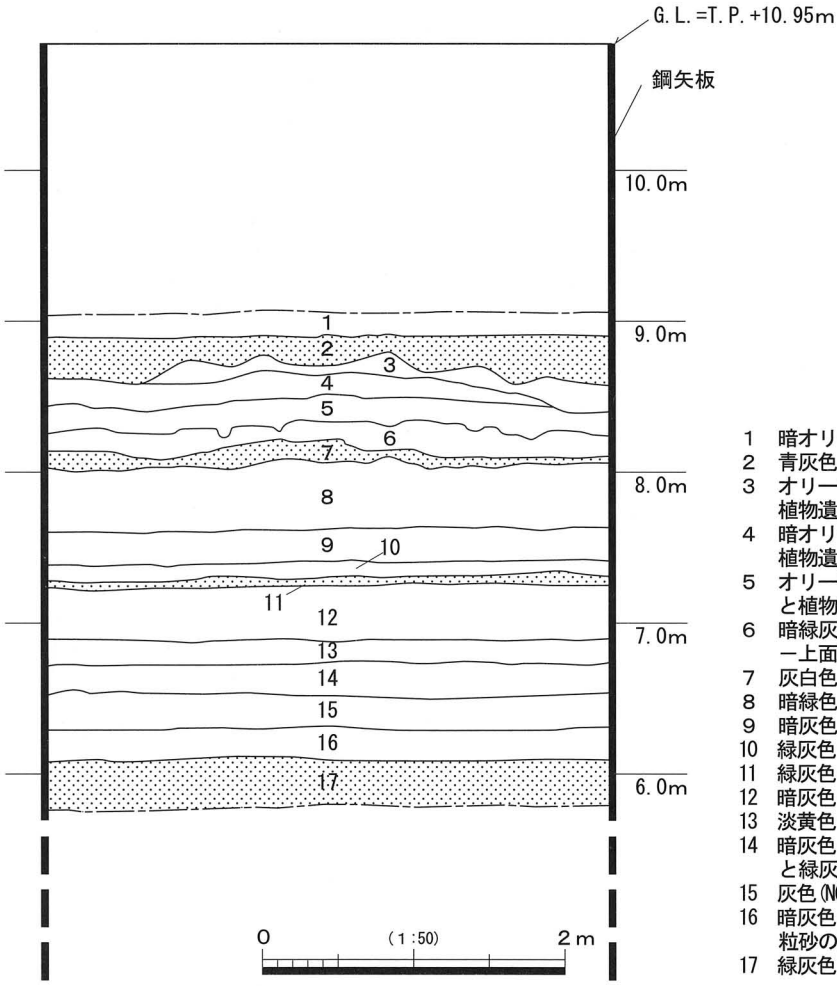
2）層序

現地表の標高は、T.P.＋10.9m前後である。前述のとおり、現地表下約２m以上については観察していない。それ以下現地表下約５mまでで１～17層の17枚の地層を確認した。

１層暗オリーブ灰色粗粒砂混粘土質シルト・２層青灰色粗粒砂～礫は、ともに含水層である。３～５層はオリーブ灰色～オリーブ黒色の粘土質シルト主体の地層で、砂質シルト・植物遺体・礫などを含む互層である。６層は暗緑灰色礫少量混砂質シルトで、比較的しまりのよい地層で、上面に踏み込みがある。７層は灰白色～緑灰色の粗粒砂～礫である。８～10層は暗緑色～灰色系の粘土質シルトで、９層は植物遺体を含む。11層は緑灰色極細粒砂である。12～16層は、灰色系の粘土質シルト・極細粒砂などからなる互層である。最下で確認した17層は極細粒砂で、ここからの湧水は多かった。このうち、２層粗粒砂～礫は、東隣の６次－２区で検出した河川ＮＲ101に対応するものと考えられる。また、７層粗粒砂～礫および８層粘土質シルトは、西隣の６次－３区の７層細粒砂・８層粘土にそれぞれ対応するものと考えられる。既往調査の結果を踏まえれば、２層は近世の河川に、７層は近世以前（平安末～中世）の洪水砂および河川堆積層にあたり、８層は平安時代以降の水田耕作土の可能性がある。

3．まとめ

今回の調査では、第６次調査で確認された地層に対応する地層を確認した。当調査地では、８・



1　暗オリーブ灰色(2.5GY7/1)粗粒砂混粘土質シルト
2　青灰色(5BG6/1)粗粒砂～礫
3　オリーブ灰色(5GY6/1)粘土質シルトと植物遺体の互層
4　暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質シルトと植物遺体・礫の互層
5　オリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルト～砂質シルトと植物遺体・礫の互層
6　暗緑灰色(10GY4/1)礫少量混砂質シルト－上面に踏み込みあり
7　灰白色(N8/)～緑灰色(5BG6/1)粗粒砂～礫
8　暗緑色(10GY4/1)粘土質シルト
9　暗灰色(N3/)粘土質シルト(植物遺体含む)
10　緑灰色(10GY5/1)粘土質シルト
11　緑灰色(10GY6/1)極細粒砂
12　暗灰色(N3/)粘土質シルト
13　淡黄色(5Y8/3)～暗灰色(N3/)粘土質シルトの互層
14　暗灰色(N3/)～オリーブ灰色(5GY6/1)粘土質シルトと緑灰色(10GY6/1)極細粒砂の互層
15　灰色(N6)～暗灰色(N3/)粘土質シルト
16　暗灰色(N3/)粘土質シルトと緑灰色(10GY6/1)極細粒砂の互層
17　緑灰色(10GY6/1)～灰色(N6/)極細粒砂

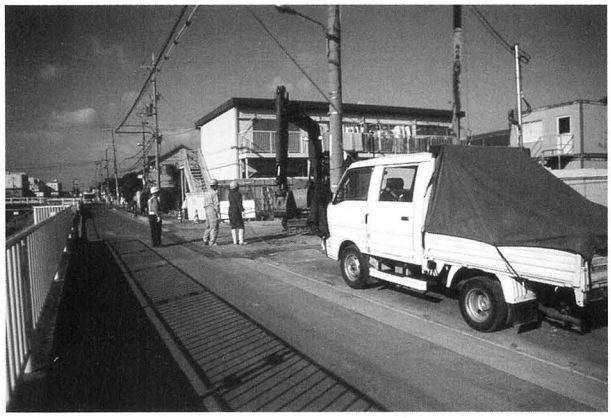
図３　断面図

12層が、比較的安定した堆積状況を示すが、それ以外は粘土質シルトを主体として植物遺体や砂を含む互層が続くことから、当地は河川～湿地の状態を繰り返していたものと考えられる。

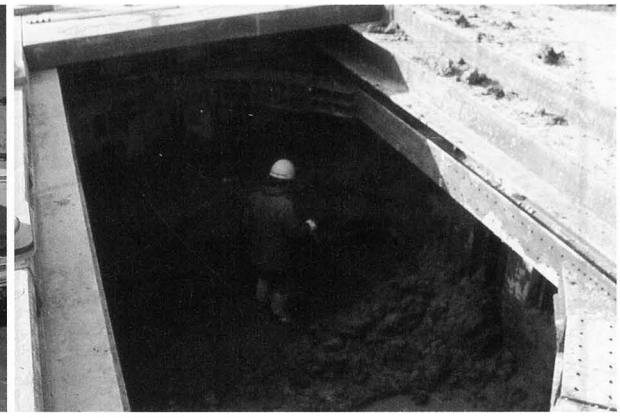
参考文献

・消　斎　1993「１．木の本遺跡（91-468）の調査」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27　平成４年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・西村公助　1996「Ⅰ　木の本遺跡（第６次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告50』（財）八尾市文化財調査研究会
・原田昌則・成海佳子・奥田　尚　1983「第３章　木の本遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会
・原田昌則・成海佳子編　1984『（財）八尾市文化財調査研究会報告４　木の本遺跡―八尾空港整備事業に伴う発掘調査―』（財）八尾市文化財調査研究会
・藤沢眞依・横田明・地村邦夫・井西貴子　1999『木の本遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
・岩瀬透・横田明　1999『木の本遺跡発掘調査・Ⅳ』大阪府教育委員会
・藤田道子　2001『木の本遺跡発掘調査・Ⅴ』大阪府教育委員会

図版一

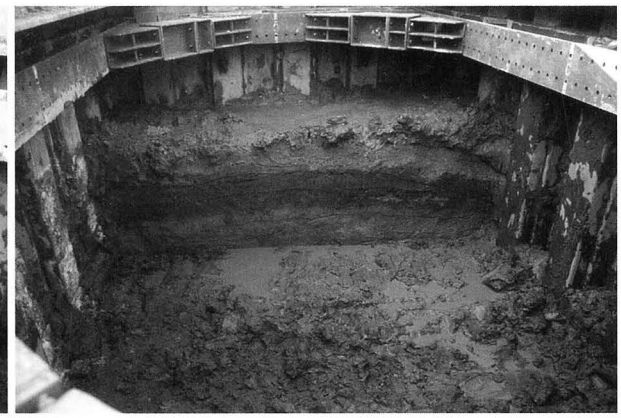


調査地周辺（東から）

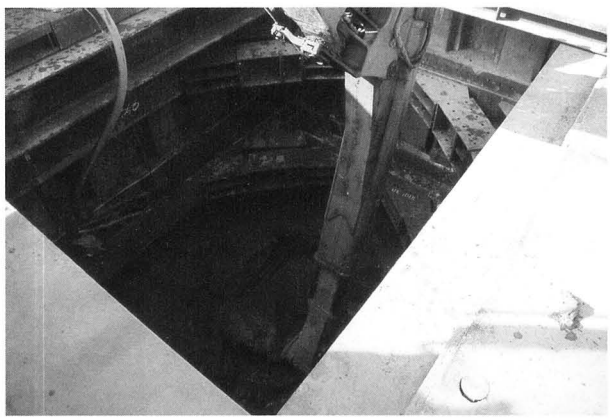


上層人力掘削（東から）

上層調査風景（東から）

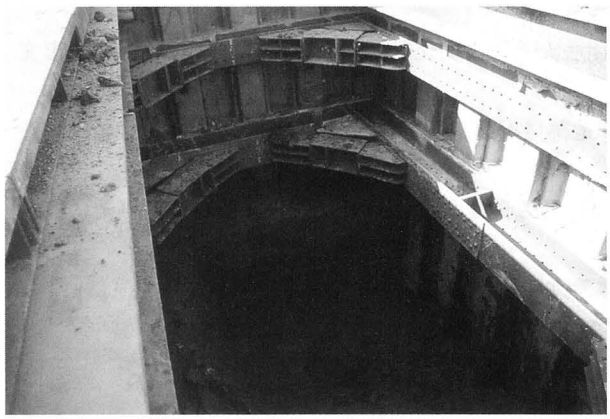


西壁１～９層



下層機械掘削（南西から）

西壁９～17層



完掘（東から）

Ⅲ　木の本遺跡第15次調査（ＳＫ2006－15）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南木の本九丁目地内で実施した公共下水道工事（平成18年度飛行場北排水区第29工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する木の本遺跡第15次調査（ＳＫ2006－15）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成19年２月19日から２月21日（実働３日）にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は49.5㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・鷹羽侑太の参加を得た。

1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成19年３月23日に完了した。

1．本書作成に関わる内業整理業務は、図面レイアウト・図面トレース－荒川が行った。他に、上記現地調査参加者の協力を得た。

1．本書の執筆・構成は、荒川が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……13

2．調査概要……14

　1）調査の方法と経過……14

　2）層序……14

　3）検出遺構と出土遺物……15

3．まとめ……15

Ⅲ　木の本遺跡第15次調査（ＳＫ2006－15）

１．はじめに

木の本遺跡は、八尾市の南西部に位置し、八尾空港とその西側一帯の東西約2.0km、南北約1.3kmの範囲に広がる弥生時代前期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市木の本一～三丁目、南木の本二～九丁目、空港一丁目がその範囲に含まれる。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.＋9.3～13.1mを測る。

当遺跡は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南端に位置する。河内平野には、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が西ないし北方向に放射状に流れている。当遺跡は、旧大和川水系のうち平野川左岸一帯の沖積地上に位置する。当遺跡の範囲は広く、西側に八尾南遺跡・太田遺跡が、東側に田井中遺跡が隣接している。

当遺跡の概要および既往調査の成果等については、既刊の報告書に詳しいので、本書での記載は割愛する。概観すると、北東部で弥生時代前期の遺構・遺物（横田他 2004）、北西部で弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期の集落に伴う遺構・遺物（原田他 1983）、南東部で平安時代中期から鎌倉時代前期の集落に伴う遺構・遺物（原田他 1984）、南西部で平安時代の集落に伴う遺物（米田 1983）、中央部（八尾空港内）で平安時代に遡る条里遺構（原田他 1984）が検出されている。このうち、弥生時代前期の遺構群は、隣接する田井中遺跡の当該時期の遺構群との関連性を持つものである。

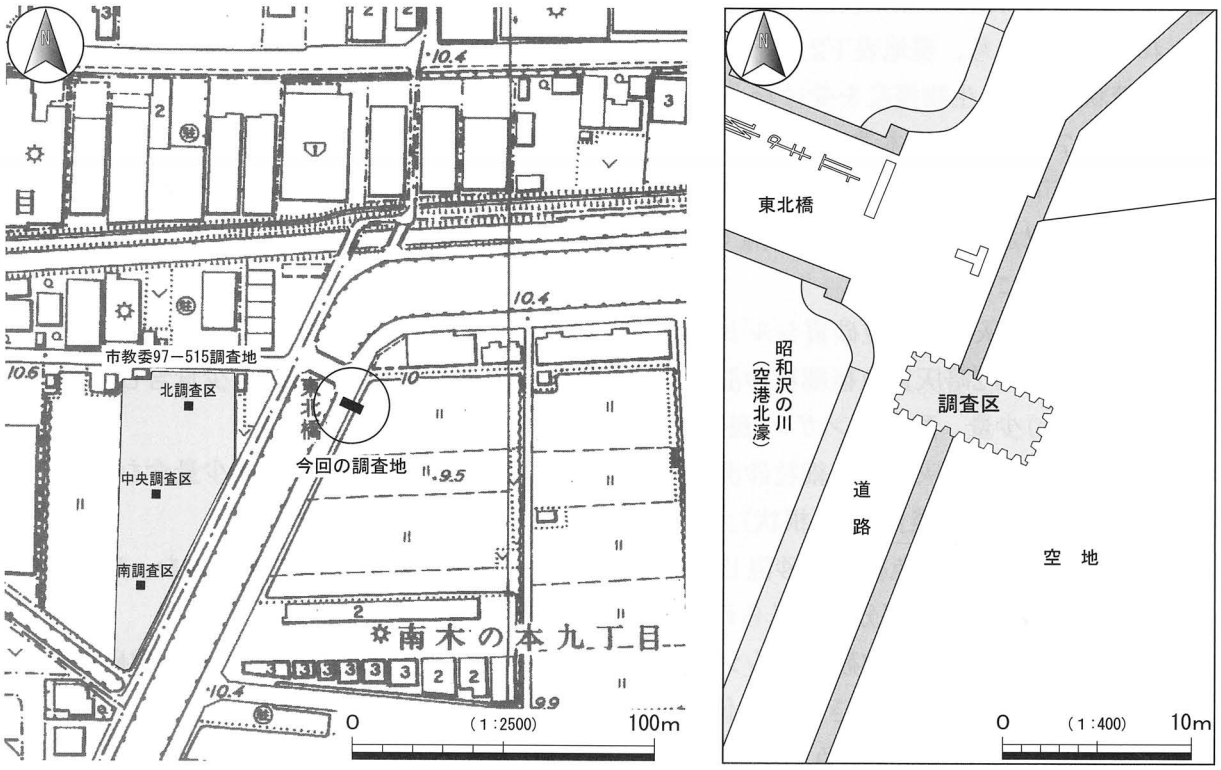


図１　調査地および調査区位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

調査地は、八尾空港の北西側に位置し、空港の北側を東西に伸びる昭和沢の川(八尾空港北濠)が南西側に屈曲する部分に架かる東北橋東側の道路および空地部分である。調査区は、下水道の発進立坑部分で、調査区の西半部が道路に、東半部が空地にかかる(図１)。

掘削については、調査区の西部が昭和沢の川の護岸擁壁設置工事により破壊されている可能性を踏まえ、調査区東半部から開始した。先ず、調査区東半部の現地表（T.P.＋10.7m）下3.0mまでの掘削を、遺構・遺物の有無を確認しながら、機械・人力を併用して行った。遺構・遺物が検出されなかったため、調査区中央部で地層の記録を取り、調査区西半部を機械で掘削した。結果として、西半部は護岸擁壁設置工事による破壊は免れており、先行工事により破壊されていた現地表下1.3～1.4m以下の地層が良好に残っていた。現地表下3.0mまでの調査終了後、現地表下4.4m（T.P.＋6.3m）までの地層確認を行った。調査で使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南方約100mの道路上の標高値：T.P.＋10.4m)を使用した。

調査の結果、周辺の既往調査で確認されている平安時代中期以降の耕作土に対照される地層が確認された。

2）層序（図２）

調査区中央部の東向き断面で地層の記録を行った。８層以下は、地層確認で確認された地層で、図２に示した７層・８層の層界以下は、模式的な柱状図である。現地表下1.4～2.2m（T.P.＋9.3～8.5m）に堆積する１層から５層までは、昭和沢の川を挟む西隣で市教委が実施した調査（木の本遺跡97－515の調査）で確認されている平安時代中期以降の耕作土（吉田 1997）に対照できる。現地表下2.3～3.7m（T.P.＋8.35～7.0m）以下に堆積する６層から９層までは、湿地性堆積物と見られる。そのうち、現地表下2.35～2.6m(T.P.＋8.35～8.1m)に堆積する６層は、極細粒砂を斑状・管状に含み、生物擾乱を受けたものと推測される。現地表下2.6～3.0m(T.P.＋8.1～7.7m)に堆積する７層は、木の本遺跡97－515の各調査区で確認されている炭酸鉄を含む地層に対照できる。現地表下3.7m（T.P.＋7.0m）以下に堆積する10層は、木の本遺跡97－515の中央調査区・南調査区で確認されている砂層に対照できる地層で、河川堆積物と見られる。以下に、調査区で確認された地層について記す。

１層：2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂質シルト。炭化物を含む。酸化鉄・酸化マンガン(斑点状)。

２－１層：2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂混じる粘土質シルト。細礫までの砂礫を少量含む。酸化鉄(斑点状)少量、酸化マンガン(斑点状)多。

２－２層：2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂混じる粘土質シルト。細礫までの砂礫を少量含む。２－１層より粘土質。酸化鉄(糸根状)。

３層：2.5Y4.5/2暗灰黄色極細粒砂混じる粘土質シルト。細礫までの砂礫を多く含む。南部では、２層と４層の間で部分的に見られる。酸化鉄(糸根状)密。

４層：2.5Y4/1黄灰色極細粒砂混じるシルト質粘土。所により見られる葉層状の極細粒砂を挟み、上中下の３層に細分できる。酸化鉄(糸根状)。

５層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。酸化鉄(糸根状)は本層の上部まで見られる。

６層：2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色極細粒砂多く混じる粘土質シルト。5G4/1極細粒砂を斑状・

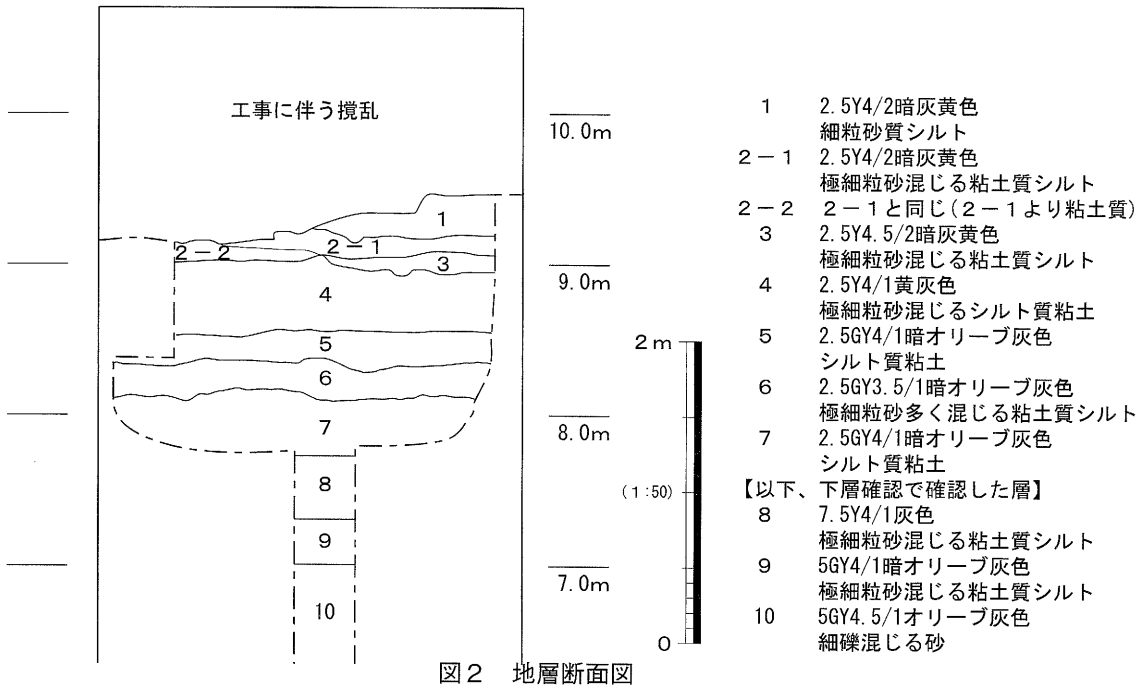


図２　地層断面図

管状に含む。

７層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。上部に炭酸鉄が多く見られる。

８層：7.5Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。

９層：5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。

10層：5GY4.5/1オリーブ灰色細礫混じる砂。平行層理が見られ、細礫の混じりが多い上層と極粗粒砂までの砂が目立つ下層に分けられる。

３）検出遺構と出土遺物

平面的に検出された遺構はなかった。出土遺物は、４層に土師質の土器の極細片が１点含まれていたが、取上げは不可能であった。

３．まとめ

今回の調査では、周辺の既往調査において確認されている平安時代以降の耕作土層と対照できる地層を確認した。このことから、今回の調査地周辺も平安時代以降は耕作地として利用されていたと考えられる。下層部分では遺構・遺物の検出はなく、地層の堆積状況から調査地は河川・湿地であったと推測される。

参考文献

・横田　明・山田隆一編　2004　『大阪府埋蔵文化財調査報告書2003－２　木の本遺跡』　大阪府教育委員会
・原田昌則・成海佳子・奥田　尚　1983　「第３章　木の本遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』　八尾市教育委員会
・米田敏幸　1983　「１．木の本遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査―その成果と概要―』（財）八尾市文化財調査研究会
・原田昌則・成海佳子編　1984　『(財)八尾市文化財調査研究会報告４　木の本遺跡―八尾空港整備事業に伴う発掘調査―』(財)八尾市文化財調査研究会
・吉田野乃　1997　「４．木の本遺跡（97－515）の調査」『八尾市文化財調査報告　平成10年度国庫補助事業八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』　八尾市教育委員会

図版一

調査地全景および機械掘削状況（北東から）

調査区中央部地層断面（東から）

Ⅳ　山賀遺跡第13次調査（ＹＭＧ2007－13）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市山賀町一丁目・三丁目地内で実施した公共下水道工事（新家排水区第１工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する山賀遺跡第13次調査（ＹＭＧ2007－13－１・２）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査の期間・調査担当者・調査面積・調査補助員は、以下の通りである。

山賀遺跡第13次１調査区の調査（ＹＭＧ2007－13－１）

期間：平成19年４月２日～平成19年４月５日（実働４日）

調査担当者：西村公助

調査面積：24.64㎡

調査補助員：青山　洋・鷹羽侑太・中浜輝志

山賀遺跡第13次２調査区の調査（ＹＭＧ2007－13－２）

期間：平成19年５月21日～平成19年５月24日（実働４日）

調査担当者：荒川和哉

調査面積：26.88㎡

調査補助員：市森千恵子

1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成19年６月５日に完了した。

1．本書作成に関わる内業整理業務の担当は、以下の通りである。

【図面レイアウト・図面トレース】荒川・西村、【遺物実測】市森、【執筆】荒川・西村（文責は目次に記載）、【編集】荒川、他に上記現地調査補助員の協力を得た。

本　文　目　次

1．はじめに（荒川）……17

2．１調査区の調査概要（西村）……18

　1）調査の方法と経過……18

　2）層序……18

3．２調査区の調査概要（荒川）……18

　1）　調査の方法と経過 ……18

　2）　層序 ……18

　3）　検出遺構と出土遺物 ……19

4．まとめ（荒川）……22

Ⅳ　山賀遺跡第13次調査（ＹＭＧ2007－13）

１．はじめに

山賀遺跡は、八尾市北部と東大阪市南部の西寄りに位置する。現在の行政区画では、八尾市新家町一～八丁目・山賀町一～六丁目、および東大阪市若江西新町五丁目・若江南町四～五丁目に当たり、東西・南北ともに約0.8kmの範囲で広がる縄文時代後期以降の複合遺跡である。

地理的には、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南部、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.＋3.3～5.9mである。当遺跡の周辺には、東に西郡遺跡・西郡廃寺、南東に萱振遺跡、南西に友井東遺跡・美園遺跡、西に新上小阪遺跡・小若江遺跡、北西に上小阪遺跡、北に若江北遺跡など、多くの遺跡がある。

当遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行われた楠根川改修工事の掘削残土から弥生時代前期の土器・石器が多量に発見されたことにより周知されるようになった。その後、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現、(財)大阪府文化財センター)・東大阪市教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当研究会)により多くの調査が行われている。これらの調査の成果については、既刊の報告書に詳しいので、本書では記載を割愛する。

当研究会による当遺跡の調査は、12次にわたり実施されている。今回の調査地の南側で当研究会が実施した第12次調査(ＹＭＧ2006－12)では、現地表下4.0～4.1m(T.P.＋2.0～1.9m)で弥生時代中期以前と推測される畦畔状の高まりと水田耕作土と考えられる地層が確認されている（島田 2007)。

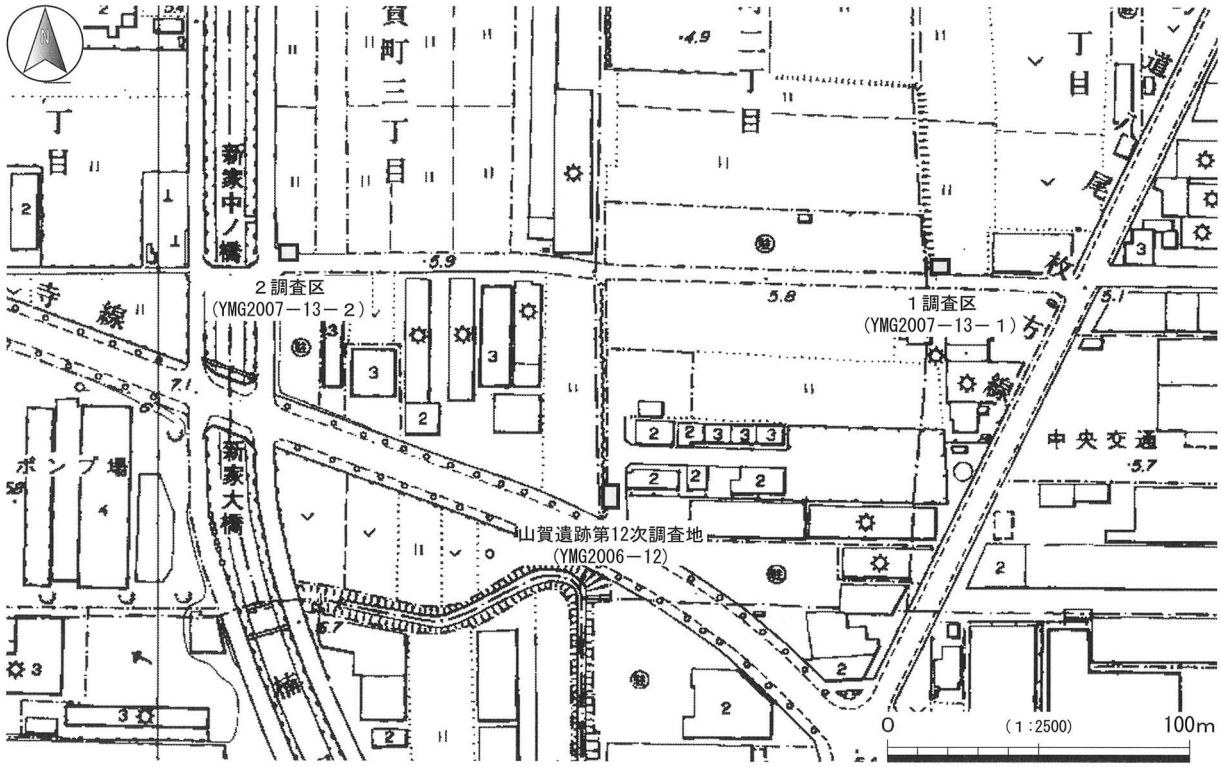


図１　調査地周辺図

２．１調査区の調査概要

１）調査の方法と経過

調査地は、府道八尾枚方線の山賀町一丁目交差点より西側約50m地点に位置する。調査区は、下水道の立坑部分の工事により破壊される部分である。規模は、南北4.4m・東西5.6mの方形で、調査面積は24.64㎡である。

調査は、市教委の埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。掘削については、現地表(T.P.＋5.75m前後)下4.8m前後までを機械と人力を併用して行った。

調査の結果、検出された遺構および遺物の出土はなかった。

２）層序

現地表下から4.8m前後までに７層の地層堆積を確認した。

０層盛土

１層　N3/0暗灰色細粒砂混粘土。【旧水田耕作土】。

２層　10YR4/4褐色細粒シルト質粘土。

３層　10YR6/1褐灰色細粒シルト。

４層　5B4/1暗青灰色粗粒～細粒シルト。

５層　5Y6/1灰色粗粒～細粒砂。

６層　5B4/1暗青灰色粘土。２～６層は河川堆積である。

３．２調査区の調査概要

１）調査の方法と経過

調査地は、八尾市山賀町三丁目地内の楠根川に架かる新家中ノ橋の東詰に位置する。調査区は、下水道の立坑部分の工事により破壊される部分である。規模は、南北4.8m・東西5.6mの方形で、調査面積は26.88㎡である。

調査は、市教委の埋蔵文化財調査指示書に基づき、下水道工事の進捗状況を考慮しながら実施した。掘削については、現地表(T.P.＋5.9m前後)下1.8mまでは、工事に伴いすでに掘削されていたため、現地表下1.8mから2.8m前後までを、地層の観察に比重を置き、遺構・遺物の有無を確認しながら人力・機械併用（主に機械）で行った。現地表下2.8m以下、工事により破壊される現地表下5.0mまで、下層確認を行った。

調査の結果、平面的に検出された遺構はなかったが、近世以降と推測される耕作に伴う小規模な遺構埋土を確認した。出土遺物は、須恵器の破片２点で、整理用コンテナ（縦60cm×横40cm×高さ20cm）１箱に収まる。

２）層序

調査地で確認された地層は、小規模な遺構埋土を除き17層確認された。１層～10層が調査区中央部北向き断面で確認された地層で、11層以下が下層確認時に北壁で確認された地層である。以下に各層について記す。

１層　10GY3/1暗緑灰色砂質シルト(細粒で粗粒砂混じり)。【旧水田耕作土】

２層　10GY4/1暗緑灰色～10GY5/1緑灰色礫(径７㎜まで)混じる砂質シルト(粗粒で砂がち)。下部に３層のブロック(径５cmまで)【水田耕作土】

３層　5Y4/1灰色砂（極粗粒～極細粒）混じる粘土質シルト。【水田耕作土】

４層　10Y3.5/1灰色砂礫（径３㎜まで）混じる粘土質シルト。上部に砂礫が斑状に多く混じり、下部に7.5Y4.5/1灰色粘土質シルトのブロック（径６cmまで）を多く含む。酸化鉄が染み状に沈着。【水田耕作土】

５層　2.5Y2.5/1黒褐色砂（細粒～極細粒）混じる粘土質シルト。乾痕が見られる。【６層の土壌化層】

６層　7.5Y5/1灰色砂（極細粒）混じる粘土質シルト。

７層　7.5Y4/1灰色砂（極細粒）混じる粘土質シルト。

８層　2.5Y4/1黄灰色砂（極細粒）混じる粘土質シルト。【９層の土壌化層】

９層　2.5Y4.5/1黄灰色砂（極細粒）混じる粘土質シルト。5Y5/1灰色砂（細粒～極細粒）が斑状に混じる。

10層　5Y4.5/1灰色シルト質砂（細粒～極細粒）。２層～10層上部に酸化鉄が管状に沈着。

11層　10Y5/1灰色シルト混じる砂（細粒～極細粒）。

12層　N7/0灰白色砂（上部：中粒～極細粒、下部：極粗粒～中粒）。5G5/1緑灰色砂（細粒～極細粒）の薄層とシルト質砂（細粒～極細粒）の葉層の互層を上部に挟む。主に上部に木本の植物遺体を含む。

13層　2.5GY6.5/1明オリーブ灰色砂（極粗粒混じる粗粒～中粒）。10Y4/1灰色砂（極細粒）混じる粘土質シルトの葉層を挟む。

14層　7.5Y3/1オリーブ黒色砂（極細粒）混じる粘土質シルト。ブロック状で5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土のブロック（径1.5cm前後）・炭化物粒を含む。【遺構埋土か】

15層　10Y3/1オリーブ黒色砂（極細粒）混じる粘土質シルト。一部ブロック状で、2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質砂（極細粒）を斑状に含む。木本の植物遺体を少量含む。【遺構埋土か】

16層　10Y4.5/1灰色シルト質砂（細粒～極細粒）。

17層　2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂質（細粒～極細粒）泥。上部に炭化物粒を層状に含む。【18層の土壌化層か】

18層　2.5GY4/1暗オリーブ灰色泥質砂（細粒～極細粒）。2.5GY7/1明オリーブ灰色砂（極粗粒～極細粒）のレンズ状の薄層を挟む。

19層　N7/0灰白色砂（粗粒、下部は細粒～極細粒へと漸移）。

３）検出遺構と出土遺物

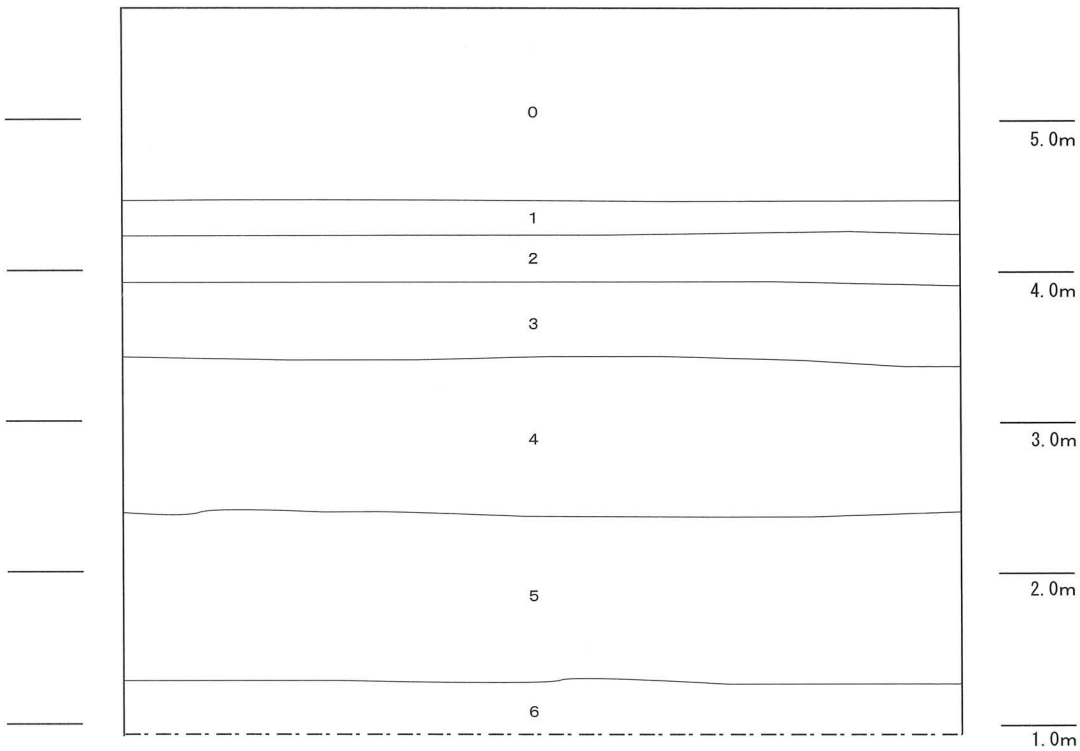
平面的に検出された遺構はなかった。調査区中央部北向き地層断面で、１層に覆われ２層を切る遺構埋土を確認し、３層上面に２層を埋土とする凹凸を確認した。いずれも、耕作に伴うものと見られる。時期を比定できる出土遺物はなく時期は不明であるが、近世以降と推測される。

出土遺物は、１層および４層（３層との境界付近）から須恵器の破片が１点ずつ出土している。４層から出土した須恵器杯身は、６世紀代のものと見られる。４層は、出土遺物から、古墳時代後期以降の堆積層と考えられる。

水　田
バス駐車場
工　場
1調査区
(YMG2007－13－1)
道　路
山賀町一丁目
交差点
バス駐車場
倉庫
工場
小屋
小屋
府道八尾枚方線
バス会社敷地
楠根川
水田
水田
マンション
2調査区
(YMG2007－13－2)
道路
道　路
新家中ノ橋
小屋
工場
小屋
水田
工場
0
(1:500)
20m

図２　調査区位置図

１調査区　北壁



２調査区　北壁

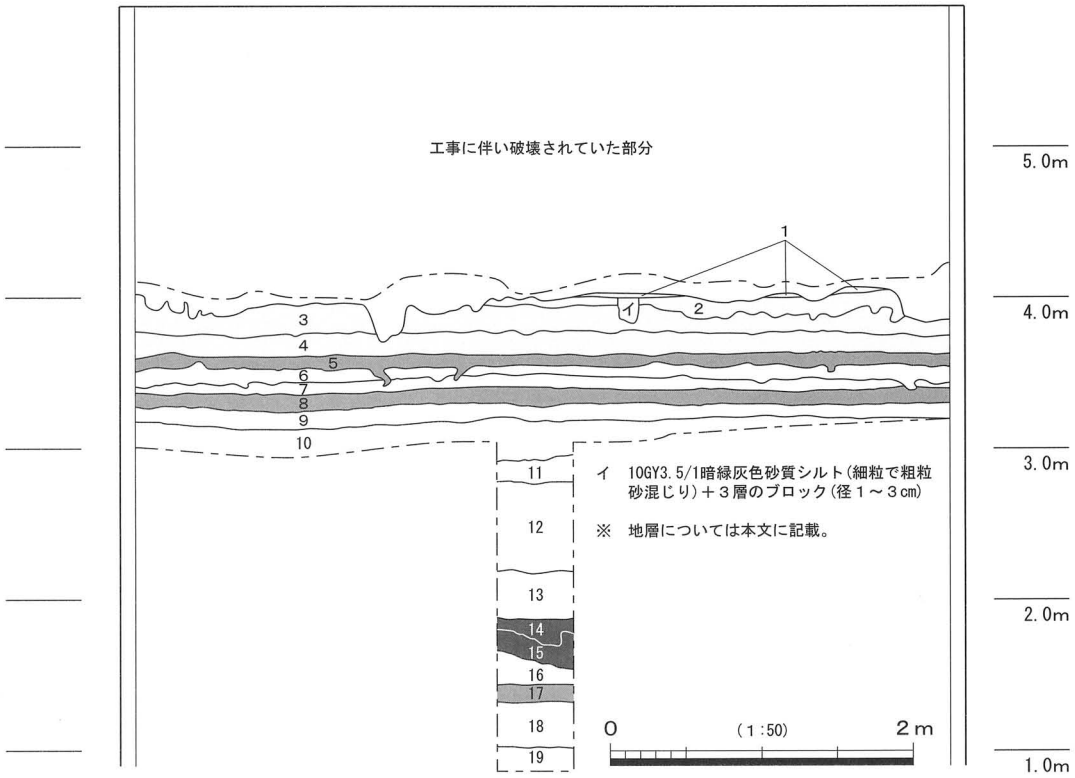


図３　１・２調査区　地層断面図

４.まとめ

今回の調査は、１・２調査区ともに平面的に検出された遺構はなく、出土遺物も殆どなかった。しかし、地層観察の結果から、調査地周辺の環境とヒトの活動の一端を窺うことができた。

１調査区　旧耕作土の下位に、河川堆積物と見られる粗粒砂～粘土の堆積層が確認された。出土遺物がないため、河川の形成・埋没時期は不明である。砂層が、第12次調査地で確認された弥生時代中期以前の水田耕作土や２調査区で確認された遺構埋土の上下に堆積する砂層と対照できるものであれば、この時期も河川であった可能性がある。

２調査区　現地表下1.9～2.3m（T.P.＋4.0～4.4m）で、近世以降の耕作土と、耕作に伴い形成されたと見られる遺構埋土が確認された。また、下層確認部分の現地表下4.1～4.4m（T.P.＋1.9～1.6m）で、遺構埋土と見られる地層が確認された。出土遺物がないため時期は不明であるが、第12次調査地の地層の相対関係と対照すれば、弥生時代中期以前と推測される地層に相当する。調査地周辺において、上位の砂層を除去した面で遺構検出面があると推測される。

参考文献

・島田裕弘 2007「Ⅷ　山賀遺跡第12次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告98』（財）八尾市文化財調査研究会

調査地周辺（南東から）

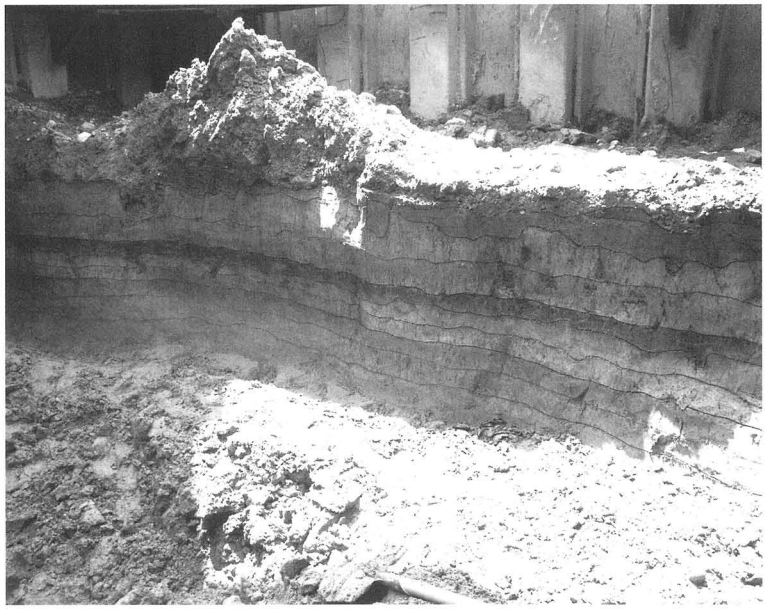
機械掘削［T.P.＋3.25mまで］（西から）

北壁［T.P.＋3.25mまで］（南から）

図版二　2調査区

調査地全景（南から）

下層確認部分掘削状況（南西から）



地層断面 T.P.＋4.0～3.0m付近
（調査区中央部北向き、北西から）

Ｖ　弓削遺跡第７次調査（ＹＧＥ2007－７）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市弓削町二丁目・志紀町南四丁目地内で実施した公共下水道工事（18－24工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する弓削遺跡第７次調査（ＹＧＥ2007－７）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査の期間・調査担当者・調査面積・調査補助員は、以下の通りである。
期間：平成19年６月４日～平成19年６月19日（実働10日）
調査担当者：荒川和哉
調査面積：約33.4㎡
調査補助員：市森千恵子・梶本潤二・鷹羽侑太・中浜輝志・中村百合・村井厚三

1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成19年７月31日に完了した。

1．本書作成に関わる内業整理業務の担当は、以下の通りである。
図面レイアウト・図面トレース・編集・執筆：荒川
遺物実測・遺物図面トレース：市森
他に上記現地調査補助員の協力を得た。

本　文　目　次

1．はじめに……25
2．調査概要……28
　1）調査の方法と経過……28
　2）層序……28
　3）検出遺構と出土遺物……31
3．まとめ……37

V　弓削遺跡第７次調査（ＹＧＥ2007－７）

１．はじめに（図１、表１）

弓削遺跡は、八尾市南東部に位置する。現在の行政区画では、八尾市志紀町南二丁目・四丁目、および弓削町三丁目・弓削町南三丁目の一部に当たり、東西約0.5km・南北約0.7kmの範囲で広がる弥生時代後期以降の複合遺跡である。

地理的には、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南部、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地上に位置する。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.＋12.8～15.0mである。当遺跡の周辺には、長瀬川を挟んで北東側には東弓削遺跡が、北西側には志紀遺跡・田井中遺跡・木の本遺跡があり、南側には本郷遺跡(柏原市)が隣接する。本郷遺跡は、弓削遺跡と一連の遺跡と捉えられる。

当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会(以下、市教委とする)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当研究会とする)により発掘調査が行われている。本郷遺跡内では、柏原市教育委員会により発掘調査が行われている。

今回の調査地周辺における弓削遺跡・本郷遺跡の既往調査については、図１・表１に示したが、以下に、これらの主な調査成果を時期ごとに概観する(文中の番号は図１の調査地番号)。

縄文時代　両遺跡内でヒトの活動の痕跡が見られるのは縄文時代中期以降で、本郷遺跡北部の22・23・36で縄文時代中期・晩期の土器が出土している。22で検出された縄文時代晩期の埋甕を除き、砂層からの出土で、縄文時代の両遺跡の状況を知るまでには至っていない。

弥生時代前期・中期　両遺跡で弥生時代前期の遺構・遺物は確認されていない。弥生時代中期には、弓削遺跡南部の８・11、本郷遺跡北部の23・24・29で土器が出土している。また、24では溝状遺構が確認され、29では土器群を伴う土坑が検出されていることから、ヒトの居住があったことが窺えるが、これらの面的な広がりは確認されていない。

弥生時代後期　本格的なヒトの活動の痕跡が見られるのは、弥生時代後期になってからで、両遺跡で遺構・遺物が多く検出されている。その中から主立ったものを挙げると、弓削遺跡北部の１で大量の土器が出土した南北に伸びる大溝、本郷遺跡北部の29で方形周溝墓・小銅鐸を伴う溝が検出されている。これらの調査成果から、弥生時代後期には集落としてのまとまりを持つようになったことが窺える。

古墳時代初頭・前期　両遺跡で古墳時代初頭・前期の「遺物包含層」が確認されており、この時期の明確な遺構は本郷遺跡の22で井戸・溝状遺構が、29でこの時期を前後する溝が検出されている。弓削遺跡北東部の21では、一括性が高い古墳時代初頭の土器が出土しており、その中には伊勢湾地方からの搬入品であるＳ字口縁甕や阿波地方からの搬入品である複合口縁壺が出土しており、人的・物的交流があったことを窺わせる。

古墳時代中期・後期　この時期の遺構は、主に弓削遺跡南西部の７で中期の土坑、本郷遺跡北東部の25で後期の溝、同じく北西部の29で中期の竪穴住居・大溝が検出されている。これらの遺構・遺物が検出された北側の弓削遺跡南部から本郷遺跡の北東部にかけての７・８・22・24で埴輪が出土しており、埋没古墳が存在する可能性がある。

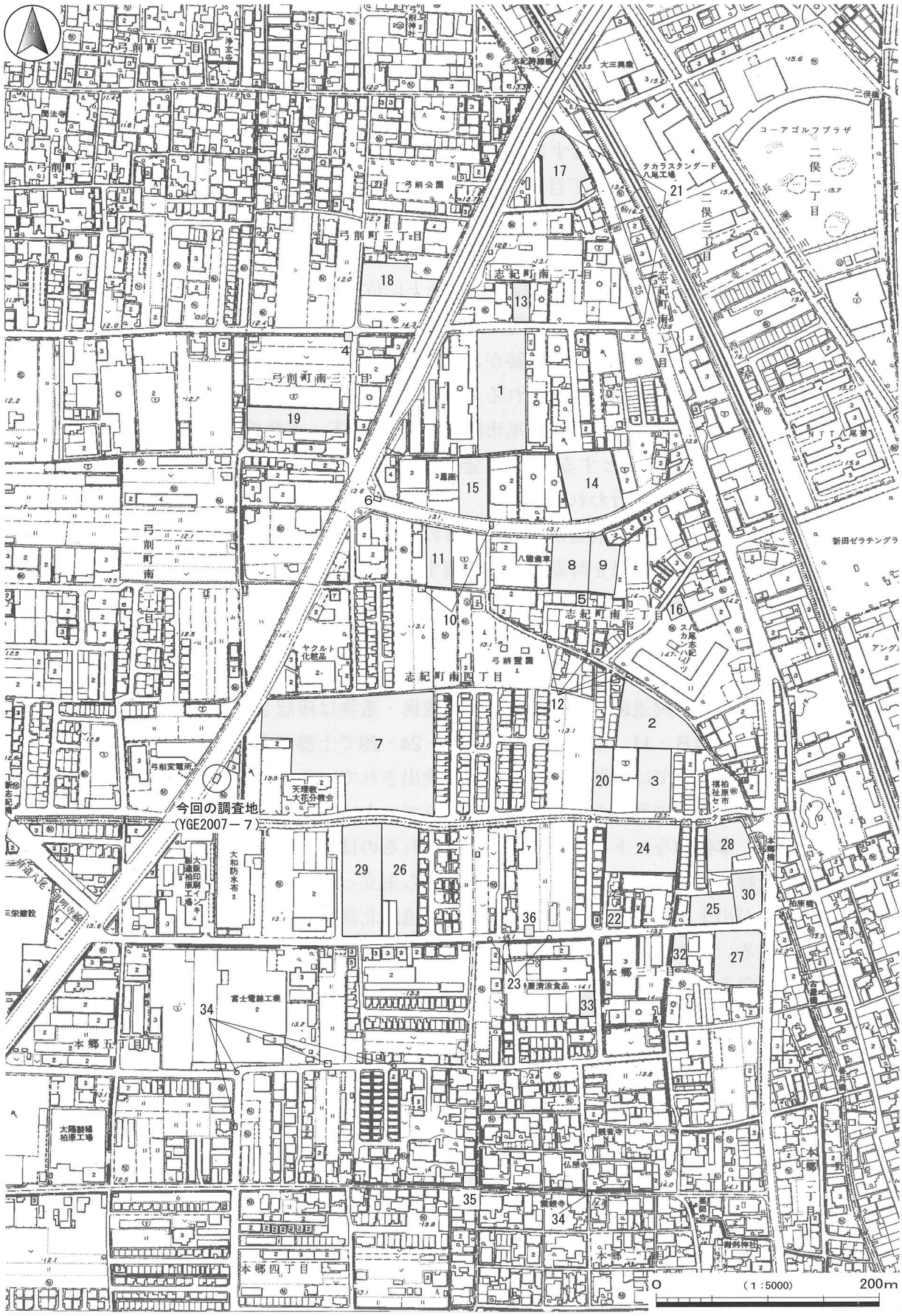

今回の調査地
(YGE2007－7)
弓削町二丁目
弓削町三丁目
弓削町南三丁目
弓削町南
志紀町南一丁目
志紀町南二丁目
志紀町南四丁目
二俣一丁目
二俣三丁目
本郷
本郷五丁目
本郷四丁目
本郷一丁目
コーアゴルフプラザ
タカラスタンダード八尾工場
大三興業
八尾倉庫
ヤクルト化粧品
弓削変電所
天理教大北分教会
大和防水布
富士電線工業
太陽製鋼柏原工場
福祉センター
新田ゼラチングラ
NTT八尾
0
(1:5000)
200m

図１　調査地周辺図

表１　周辺の調査一覧表

遺跡	番号	調査名	所在地	調査主体	主な成果	文献/発行年
弓削（八尾市）	1	YGE84－1	志紀町南２	当研究会	弥生後期：大溝（土器群）、奈良：井戸（墨書人面土器）	『昭和59年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告７/1985
	2	90－533	志紀町南４	八市教委	弥生後期末：土器	『八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告25/1992
	3	94－631	志紀町南４	八市教委	弥生後期末：土器	『八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告33/1996
	4	97－444	弓削町南３	八市教委	弥生後期前葉～中葉：井戸・溝・土器	『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10/2000
	5	98－380	志紀町南３	八市教委	河川堆積層（弥生土器・須恵器・埴輪）、弥生後期：土器	『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40/1999
	6	YGE99－2	志紀町南２	当研究会	河川堆積層、弥生後期末～古墳初頭：土坑	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』/2001
	7	99－429	志紀町南４	八市教委	弥生後期：土器、古墳中期：土坑、古墳中期後半：埴輪、中世以降：井戸	『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44/2001
	8	99－524	志紀町南３	八市教委	弥生中期：土器、弥生後期：溝状遺構・小穴・落込み、古墳中期：溝	同上
		YGE2000－3	志紀町南３	当研究会	弥生後期：土器、古墳後期：埴輪、近世：溝	八尾市教育委員会『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告３ 平成13年度』/2002
	9	2002－66	志紀町南３	当研究会	近世以降：溝	『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48/2003
	10	YGE2002－4	志紀町南３	当研究会	弥生後期：土坑	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』/2003
	11	2002－23	志紀町南３	当研究会	弥生中期～後期：土器・石器	『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48/2003
	12	YGE2003－5	志紀町南３・４	当研究会	河川堆積層	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告78』/2004
	13	2003－195	志紀町南２	当研究会	平安以降：水田畦畔	『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49/2004
	14	2003－319	志紀町南２	当研究会	遺構・遺物なし	『八尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告50/2005
	15	2004－259	志紀町南２	当研究会	古墳前期：堆積層（土器片）	同上
	16	2004－347	志紀町南３	当研究会	近世以前：河川堆積層	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53/2006
	17	2005－185	志紀町南２	当研究会	弥生後期・古墳前期・奈良以降：土器	同上
		YGE2005－6	志紀町南２	当研究会	弥生後期：土坑、奈良：土坑、平安・鎌倉：土坑・溝	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告97』/2007
	18	2005－160	志紀町南２	当研究会	「奈良時代土師器」	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53/2006
	19	2005－504	弓削町３	当研究会	近世：土坑（災害復旧坑）	『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告55/2006
	20	2007－54	志紀町南４	当研究会	奈良前期：土器群	未刊
		YGE2007－7	弓削町南２　志紀町西４	当研究会	今回報告	
弓削・志紀	21		志紀町南１・２	府教委	古墳前期：土器	『寝屋川南部流域下水道事業に伴う中垣内・志紀・弓削・太平寺遺跡発掘調査概要』/1995
本郷（柏原市）	22	81－1次	本郷３	柏市教委	縄文晩期：埋甕、古墳初頭・前期：井戸、古墳中期後半：埴輪	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概要 1981年度』/1982
	23	83－1次	本郷３	柏市教委	縄文中期末：土器、弥生中期～古墳前期：土器	『柏原市所在遺跡発掘調査概報―大県・田辺・本郷遺跡― 1983年度』柏原市文化財報告 1983－Ⅳ/1984
	24	83－2次	本郷３	柏市教委	弥生中期中葉：溝状遺構、弥生中期～古墳中期：土器、古墳後期：埴輪	同上
	25	84－2次	本郷３	柏市教委	古墳後期：溝（須恵器・獣骨）	『本郷遺跡・玉手山遺跡―マンション建設に伴う―』柏原市文化財概報 1984－Ⅵ
	26	85－1次	本郷５	柏市教委	古墳後期：須恵器・土師器・製塩土器	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1985年度』/1986
	27	88－1次	本郷３	柏市教委	「現地表下２ｍで遺物包含層を検出」	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1988年度』柏原市文化財報告 1988－Ⅰ/1989
	28	89－2次	本郷３	柏市教委	中世以降：洪水層	『高井田遺跡・本郷遺跡―1989年度公共事業に伴う―』柏原市文化財概報 1989－Ⅳ/1990
	29	91－1次	本郷５	柏市教委	弥生中期：土坑、弥生後期：方形周溝墓・溝（小銅鐸）、古墳中期：竪穴住居	『本郷遺跡 1991・1992年度』柏原市文化財概報 1992－Ⅲ/1993
	30	91－2次	本郷３	柏市教委	古墳後期～飛鳥時代末：溝	『柏原市遺跡群発掘調査概報 1991年度』柏原市文化財概報 1991－Ⅳ/1992
	31	93－3次	本郷５	柏市教委	「土師器・須恵器の破片」	『柏原市所在遺跡発掘調査概報 1996年度』柏原市文化財概報 1996－Ⅱ/1997
	32	94－1次	本郷３	柏市教委	「現地表下0.9ｍで中近世の包含層」	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1994年度』柏原市文化財報告 1994－Ⅰ/1995
	33	94－2次	本郷３	柏市教委	近世：溝、「中世の遺物包含層」	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1994年度』柏原市文化財報告 1994－Ⅰ/1995
	34	95－1次	本郷５	柏市教委	弥生後期：土器・焼土塊、古墳～奈良：土器・鞴羽口	『柏原市所在遺跡発掘調査概報 1996年度』柏原市文化財概報 1996－Ⅱ/1997
	35	96－1次	本郷５	柏市教委	近世:耕作土、近世以前：洪水層	『柏原市所在遺跡発掘調査概報 1996年度』柏原市文化財概報 1996－Ⅰ/1997
	36	98－1次	本郷５	柏市教委	縄文晩期：土器、弥生後期～古墳前期：溝状の落込み（土器）	『本郷遺跡―公共下水道管理設に伴う―』柏原市文化財概報 1998－Ⅳ/1999

※　調査主体名称の省略については以下の通り。大阪府教育委員会：府教委、八尾市教育委員会：八市教委、柏原市教育委員会：柏市教委、（財）八尾市文化財調査研究会：当研究会
※　番号は遺跡毎の調査（開始）日の早い順に付した。

飛鳥時代～中世　この時期の遺物は両遺跡内で出土している。遺構としては、弓削遺跡南部の20で飛鳥時代後期～奈良時代前期の須恵器を主体とする土器群、弓削遺跡北部の１で奈良時代の人面墨書土器・神功開宝などが出土した井戸、同じく17で奈良時代から鎌倉時代にかけての土坑・溝、弓削遺跡北部の13で平安時代の水田、本郷遺跡北東部の30で古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が出土した溝が検出されている。

近世以降　近世には、本郷村があった本郷遺跡東部以外は概ね耕作地となっており、弓削遺跡の８・19、本郷遺跡北部の24・33などで、断面形が方形の溝状の土坑が検出・確認されている。これらの溝状の土坑は、災害復旧坑と呼ばれるもので、埋土は多くが洪水砂で人為的に埋められ、洪水により埋没した水田を復旧させる目的で掘削されたものである。

2．調査概要

1）調査の方法と経過

調査地(図２､図版一)　八尾市弓削町南二丁目・志紀町南四丁目の大阪外環状線(国道170号線)の東沿いに位置する。調査区は、下水道の立坑部分の工事により破壊される部分である。規模は、南西－北東方向に長い方形で、長辺7.35m・短辺4.55mである。調査面積は約33.4㎡である。

方法　調査とこれに継続して行われる下水道工事により深く掘削されるため、調査区の四方に鋼矢板を打設し掘削する方法が採られた。鋼矢板により囲まれるため、壁面での地層観察は不可能であることから、調査区の南壁沿いに地層観察用のあぜ(幅約50㎝)を残し掘削を行った。

掘削　掘削は、当初、市教委の埋蔵文化財調査指示書により、現地表(T.P.＋15.0m前後)下2.7m前後までが機械掘削の範囲で、以下0.5m前後までが人力掘削の範囲であった。これにより、現地表下2.7mまで機械掘削を行ったが、遺物を含む層に至らなかった。部分的に人力で掘削し、下位層の遺物・遺構の有無を調べたところ、現地表下3.2m前後までの地層には遺物を含んでいないことを確認したため、現地表下3.2mまでの地層を遺構の有無を確認しながら機械で段階的に除去した。上面で平面精査をしたが遺構が検出されず、現地表下3.4mまでの地層に含まれる遺物も少量であったため、人力・機械を併用し遺物の採取を行った。この時点で、埋蔵文化財調査指示書による掘削範囲に至ったため、市教委に報告し指示を仰いだ。その結果、指示内容が変更され、人力掘削の範囲を1.2m前後とすることになり、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果　古墳時代中期前半の溝１条、古墳時代前期後半の落込み１箇所を検出した。出土遺物は、古墳時代初頭・前期の土師器を主体し、整理用コンテナ（縦60㎝×横40㎝×高さ20㎝）10箱である。

2）層序（図３、表２、図版一）

調査区南壁沿いの地層観察用のあぜで確認された地層は、遺構埋土を含めて17層である。現地表下2.4～2.7mまでの１層～４層は、中世までには遡らない畑耕作土、以下3.0mまでの５層は洪水堆積層、以下3.5mまでの６層～８層は、古墳時代中期以前には遡らない人為的な撹拌・整地により形成された地層である。これらの地層を除去した面で、古墳時代中期前半の溝と古墳時

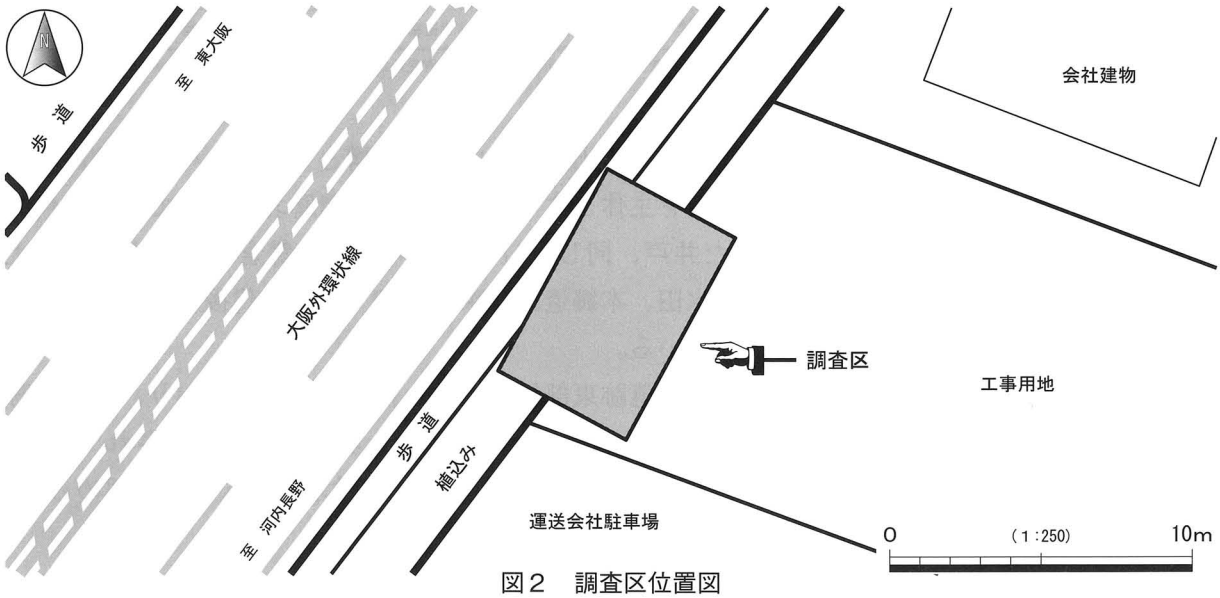


図２　調査区位置図

代前期後半の落込みが検出された。９層～10－２層は溝の埋土、11－１層～13－２層は落込みの埋土である。14層は古墳時代前期後半までに埋没した河川堆積層と推定される地層である。各層の詳細については表２に示した。

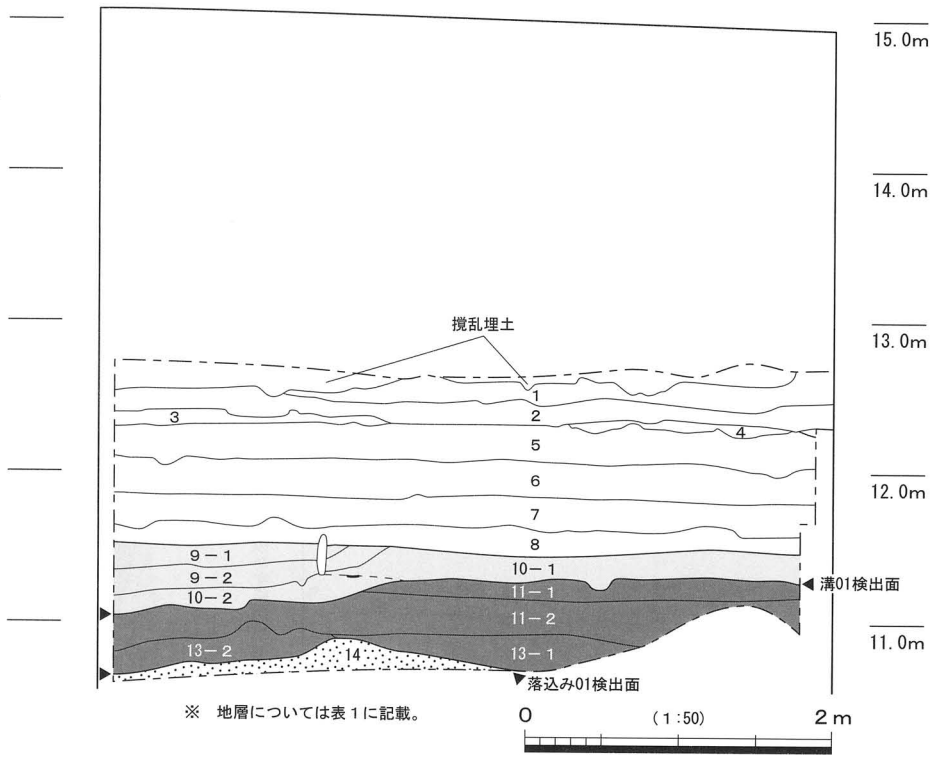


図３　地層断面図

表２　地層一覧表

層序	土色	粒度組成	堆積構造	含有物／沈着物	備考
1	10YR4.5/1にぶい黄褐色	細粒の中礫～粗粒砂混じる砂質(細粒～極細粒)シルト シルト多い	粗粒砂を斑状に含む	炭化物極少量／酸化マンガン（斑点状）	
2	2.5Y5/3黄褐色	細粒の中礫～粗粒砂混じる砂質(細粒～極細粒)シルト 粗粒砂の混じり多い		酸化マンガン(斑点状)	
3	2.5Y5/3黄褐色 10YR4.5/2褐灰色	シルト質極細粒砂 極細粒砂混じるシルト	ブロック状(径１～３cm)	酸化マンガン(斑点状)密	
4	10YR5/4にぶい黄褐色 10YR5/3にぶい黄褐色 10YR4.5/2灰黄褐色	粗粒砂～中粒砂 極細粒砂 極細粒砂混じるシルト	ブロック状(径１～３cm)	酸化鉄(染み状)	
5	2.5Y6/3にぶい黄色 10YR6.5/6明黄褐色	中粒砂～細粒砂 細粒の中礫～細礫混じる極粗粒砂～中粒砂	薄層の互層　上部の礫混じる極粗粒砂～中粒砂に斜交葉理、その他の薄層には板状葉理	上部に酸化鉄(染み状)	
6	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	細礫～粗粒砂を少量含む極細粒砂混じる粘土質シルト 極細粒砂を斑状に多く含む			
7	10Y4/1灰色	中粒の中礫～粗粒砂を少量含む極細粒砂混じる粘土質シルト		上部に酸化鉄(管状)	
8	2.5GY3/1暗オリーブ灰色 10Y4/1灰色	細粒の中礫～粗粒砂多く混じる砂質(中粒～極細粒)シルト 粘土質シルト・砂(細粒～極細粒)	所によりブロック状 斑状	極粗粒の中礫～粗粒の中礫を数個 炭化物(調査区北西部では多い)	
9－1	5GY4/1暗オリーブ灰色	極粗粒砂混じる粘土質シルト 細粒の中礫～細礫が上部に混じる			溝01埋土
9－2	2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色 5GY5/1オリーブ灰色	シルト質粘土 極細粒砂を葉層状・斑状に含む(葉層は主に下部に見られる)		上部に炭化した草本の植物遺体の極薄の葉層を挟む	
10－1	7.5GY4/1暗緑灰色 5GY4/1暗オリーブ灰色	細粒の中礫～極粗粒砂混じる砂質(中粒～極細粒)シルト 極細粒砂混じる粘土質シルトが斑状に混じる	所によりブロック状(径３～５cm前後)	中粒の中礫を数個	
10－2	10Y3/1オリーブ黒色 5GY3.5/1暗オリーブ灰色	細粒の中礫～極粗粒砂混じる砂質(中粒～極細粒)シルト 細粒の中礫～極粗粒砂混じる砂質(細粒～極細粒)シルト	ブロック状 下部に斑状に混じる		
11－1	5GY4/1暗オリーブ灰色	細粒の中礫～極粗粒砂混じる砂質(細粒～極細粒)シルト		炭化物	落込み01埋土
11－2	5GY4.5/1暗オリーブ灰色 7.5GY4.5/1暗緑灰色	細礫～極粗粒砂混じる砂質(細粒～極細粒)シルト 砂質(極粗粒～極細粒)シルトが斑状に混じる	西部では砂礫と後者の砂質シルトの混じりは少ない	炭化物	
13－1	7.5GY4/1暗緑灰色	細礫～極粗粒砂混じるシルト(僅かに粘土質)		炭化物	
13－2	7.5GY4.5/1緑灰色 2.5Y3/2黒褐色	泥質砂(細粒～極細粒) 極細粒砂混じる粘土質シルト(下部)	13－１層のブロックを少量含む	植物遺体を含む	
14	7.5GY4.5/1緑灰色 7.5GY5/1緑灰色	泥質砂(細粒～極細粒) 細粒砂～極細粒砂(下部)	葉理		河川埋土

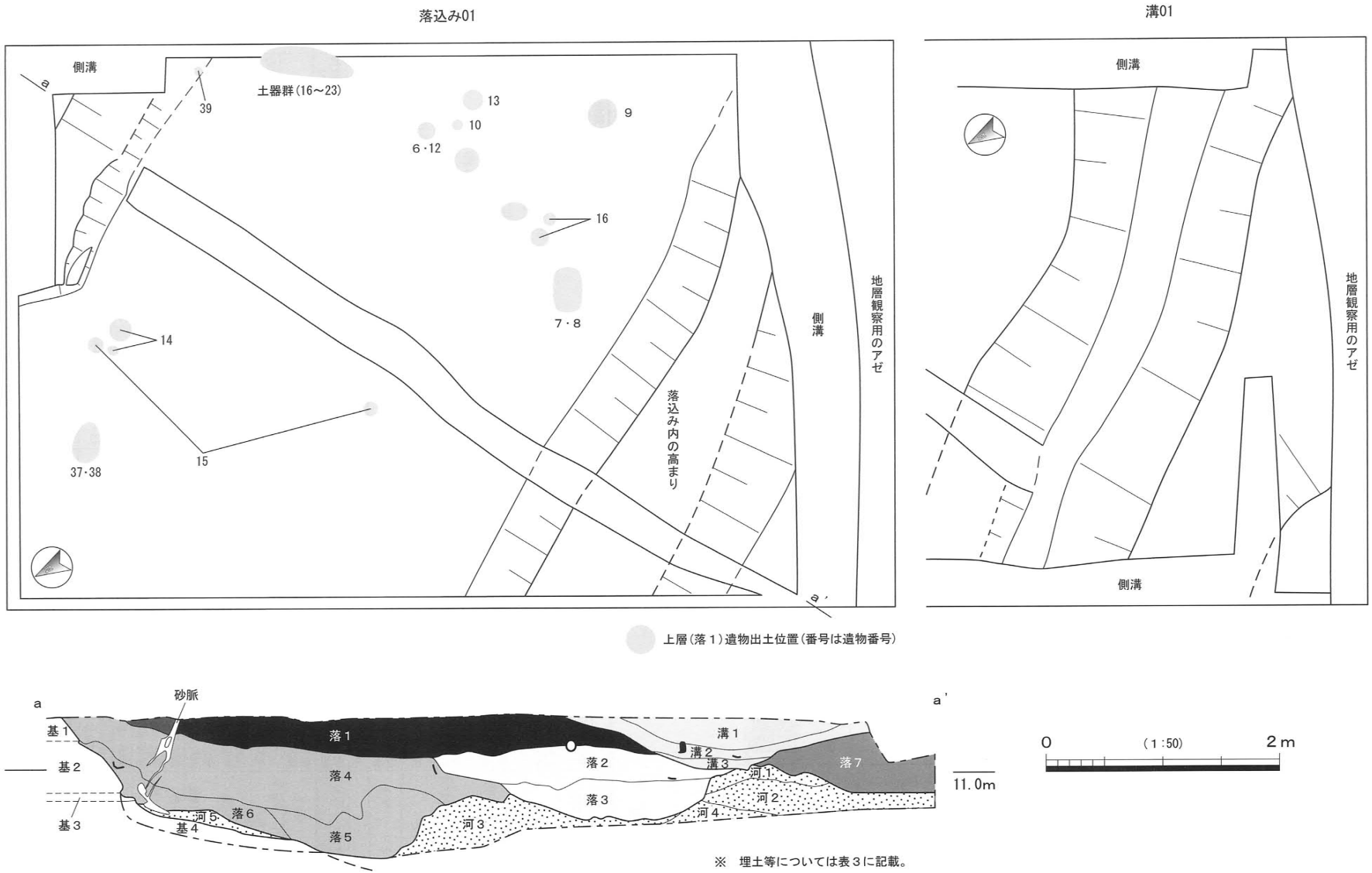


図４　検出遺構平面・断面図

表３　溝01・落ち込み01埋土一覧表

遺構	埋土	土色	粒度組成	堆積構造	含有物
溝01	溝１	2.5GY4/1暗オリーブ灰色 5GY4/1暗オリーブ灰色	極細粒砂混じる粘土質シルト極細粒砂	葉層を挟む	肩部に細粒の中礫～細礫・炭化物
	溝２	10Y3/1オリーブ黒色	粗粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト		主に肩部に中粒の中礫～細礫
	溝３	7.5Y3/1オリーブ黒色	細粒の中礫～極細粒砂混じる粘土質シルト～砂礫質泥		
落込み01	落１	2.5GY3/1暗オリーブ灰色	細粒の中礫～極細粒砂混じる粘土質シルト	南部では礫の混じり少ない	炭化物少量
	落２	10Y4/1灰色 2.5GY5/1オリーブ灰色	極細粒砂混じる粘土質シルト 細粒砂～極細粒砂	葉層を挟む	中粒の中礫～細礫・炭化木・炭化物
	落３	7.5Y3.5/1灰色 2.5GY5.5/1オリーブ灰色	極細粒砂混じる粘土質シルト 細粒の中礫～細礫細礫～粗粒砂極細粒砂	斑状レンズ状葉層状	
	落４	5GY4/1暗オリーブ灰色	中粒の中礫～極細粒砂を含む泥～泥質砂礫 南部では礫の混じりが少なく、シルト質極細粒砂・細礫～粗粒砂・細礫混じる粘土質シルト	斑状に砂礫を含み、ブロック状	
	落５	10Y4/1灰色 5GY5/1オリーブ灰色	極細粒砂混じるシルト 細粒砂～極細粒砂 細粒の中礫～粗粒砂	ブロック主体層状層状・斑状	
	落６	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	シルト質極細粒砂 細粒の中礫～粗粒砂	ブロック状斑状	
	落７	5GY3.5/1暗オリーブ灰色 5GY5/1オリーブ灰色	細粒の中礫～極細粒砂混じる粘土質シルト 極細粒砂	斑状	
河川堆積層	河１	7.5GY4/1暗緑灰色 7.5GY5/1緑灰色	極細粒砂混じる粘土質シルト シルト質極細粒砂	葉層を挟む	
	河２	7.5GY4/1暗緑灰色 7.5GY5/1緑灰色	極細粒砂混じるシルト シルト質極細粒砂	互層（薄層・葉層）	シルトに炭化物
	河３	10Y4/1灰色 2.5GY5/1オリーブ灰色 5GY5/1オリーブ灰色	極細粒砂混じるシルト 極細粒砂 極粗粒砂～粗粒砂・細粒の中礫～細礫混じる極粗粒砂～粗粒砂	互層（薄層・葉層） 互層（レンズ状の薄層）	
	河４	2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色	細粒の中礫～極細粒砂混じる粘土質シルト		
	河５	7.5Y3/1オリーブ黒色 5GY5/1オリーブ灰色	極細粒砂混じるシルト 極細粒砂	薄層・葉層を挟む	主に下部に木本の植物遺体
基盤層	基１	5GY4/1暗オリーブ灰色	極細粒砂混じるシルト質粘土		
	基２	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	極細粒砂混じるシルト質粘土		
	基３	10GY5/1緑灰色	極細粒砂混じる粘土質シルト		
	基４	10Y5.5/1灰色10Y4/1灰色	極粗粒砂～粗粒砂 極細粒砂	互層（薄層）	酸化鉄分染む部分では2.5Y5/4黄褐色
砂脈	砂脈	10YR6/6明黄褐色	細礫～極細粒砂		

３）検出遺構と出土遺物

・検出遺構とその出土遺物

８層までを除去した面（T.P.＋11.5m前後）で、古墳時代中期前半の溝１条（**溝01**）、古墳時代前期後半の溝状の落込み１箇所（**落込み01**）が検出された。

溝01（図４・図５、表３・表４、図版二・図版四）

位置・重複関係　調査区南部で検出された。**落込み01**埋土を切る。

規模　北東側の肩を除き調査区外に至るため、全長は不明。幅4.0m以上、検出面からの深さは0.45mである。調査区内では、南東－北西方向に伸びる。南西の肩は緩やかに段をなしている。

埋土　埋土は３層に分けられ、上層（図４－溝１）が粘質土と極細粒砂の互層、中層（同－溝２）が砂礫を含む粘質土、下層（同－溝３）が有機質に富む粘質土に砂礫が混じる層である。堆積状況から、下層は機能時に流水により堆積したもの、中層は人為的に埋められたもの、上層は埋め戻し後の窪みに流水により堆積したものと考えられる。埋土の詳細については、表３に記した。

出土遺物　埋土からの出土遺物は、上層からは須恵器の破片１点が出土したのみで、中層・下層から土師器・須恵器の破片、加工木が多く出土している。この他に中層と下層の境からは、板状の木製品が出土している。中層から出土した土師器の破片の中には、後に記す**落込み01**の埋土から出土した破片と接合するものが数点ある。埋土からの出土遺物のうち、須恵器２点（**１・２**）、土師器３点（**３～５**）を図化した。

時期　出土遺物と層位から、古墳時代中期前半に稼動しており、埋め戻されたと推定される。

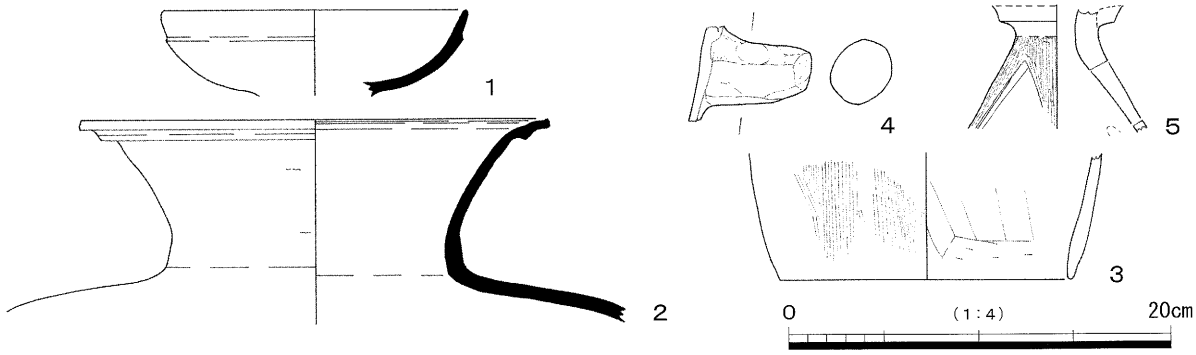


図５　溝01出土遺物実測図

表４　溝01出土遺物

遺物番号	出土遺構層位	種類器種	残存度（残存部分）	計測値(cm)	調整・文様等	色調	備考
1	溝01下層	須恵器高杯	杯底部～脚部を除く1/4	口径(15.8)	回転ナデ	10Y5.5/1灰色	
2	溝01中層	須恵器甕	口縁部～肩部の1/3	口径(24.4)	口縁部～頸部：横ナデ、体部：ナデ(外面にタタキ目残る)	10Y7/1灰白色（断面：7.5YR8/4浅黄橙色）	
3	溝01中層	土師器甑	底部の1/8	底径(15.4)	外面：縦方向のハケ調整、体部内面：ナデ、端部：ヘラケズリ	10YR8/3浅黄橙色（外：一部2.5YR6.5/6橙色）	
4	溝01中層	土師器甑？	把手		ナデ	10YR7/2.5にぶい黄橙色（外：一部2.5YR6.5/6橙色）	下部は磨耗(使用時のものか)
5	溝01下層	土師器？	(器台脚部か？)		外面：縦方向のヘラミガキ、内面：ナデ　三角形の三方透孔	2.5Y7/3浅黄色	

落込み01(図４・図６・図７、表３・表六、図版二～図版八)

位置・重複関係　調査区北東隅を除く調査区全域で検出された。**溝01**に切られる。基盤層は、調査区北東隅でのみ確認された(図４－基１～基４)。**落込み01**埋土の下位に、河川堆積物が確認された(同－河１～河４)。**落込み01**埋土は河川堆積物と基盤層を、河川堆積物は基盤層を切って堆積しており、基盤層の堆積後に河川が形成され、河川の埋没後に**落込み01**が掘削されたことがわかる。

規模・形状　調査区北東隅を除き調査区外にあるため、全体の規模・形状は不明である。幅8.0m以上、検出面からの深さ1.2mである。南東－北西方向に伸びる溝状の落込みと推定される。調査区北東隅で検出された落込みの肩は２段になっており、下段部分には農工具(鋤)により掘削されたと見られる痕が残っていた。

埋土　**落込み01**・**溝01**に直交する形で設定した埋土観察用の畦部分で確認された埋土は、大きく４層に分けられ、上位から①砂礫が混じる粘質土層(図４－落１)、②有機質に富む粘質土に砂礫を層状に含む層（同－落２・落３)、③砂礫～粘質土のブロックを主体とする層（同－落４～落６)、④砂礫が混じる粘質土層（同－落７）である。調査区北部では①と③の間に炭化物を含む粘質土の堆積が確認された。堆積状況から、①・②は人為的に埋められたもので、②は③の堆積後に形成された溝状の遺構に流水により堆積したものと考えられる。埋土の詳細については、表３に示した。調査区北東部で、河川堆積物と**落込み01**の埋土を切る砂脈が確認された。

出土遺物　埋土からの出土遺物は、①・②・③、および調査区北西部で①と③の間に堆積する粘質土から、弥生土器・古式土師器が出土している。①から出土した古式土師器は、完形のものや残存率の高いものが多いが、調査区東部の土器群から出土した土器は、破片を主体とする。土器群の土器は、Ｖ様式系・庄内式・布留式が混じっており、二次的な集積であると推測される。出土遺物の中には、埋土の異なる層位から出土した破片で接合関係を持つものが数点含まれ、**落込み01**が数次に亘る掘削がなされたことが窺える。出土遺物のうち、①(図４－落１)から出土し

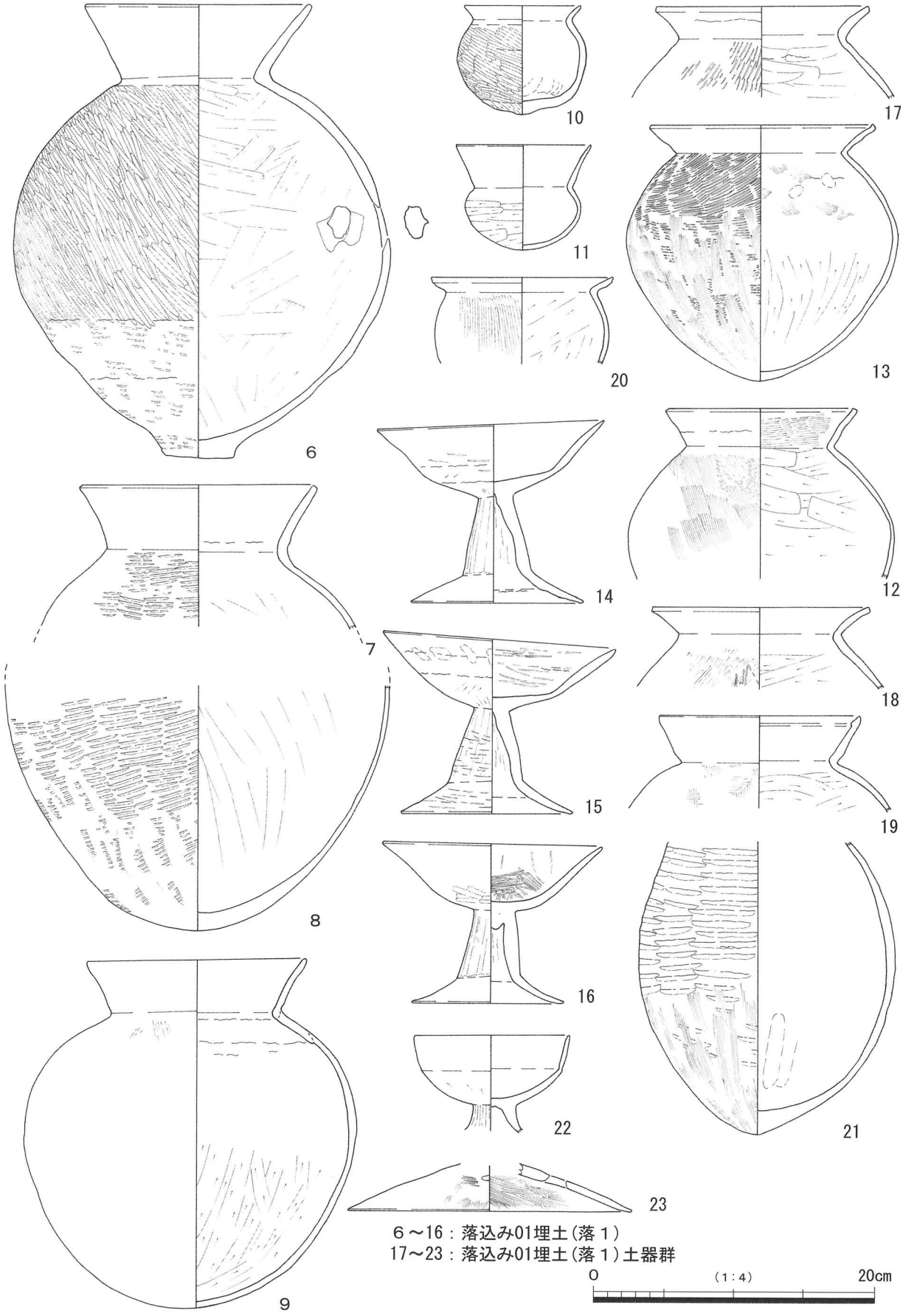


図６　落込み01出土遺物実測図①

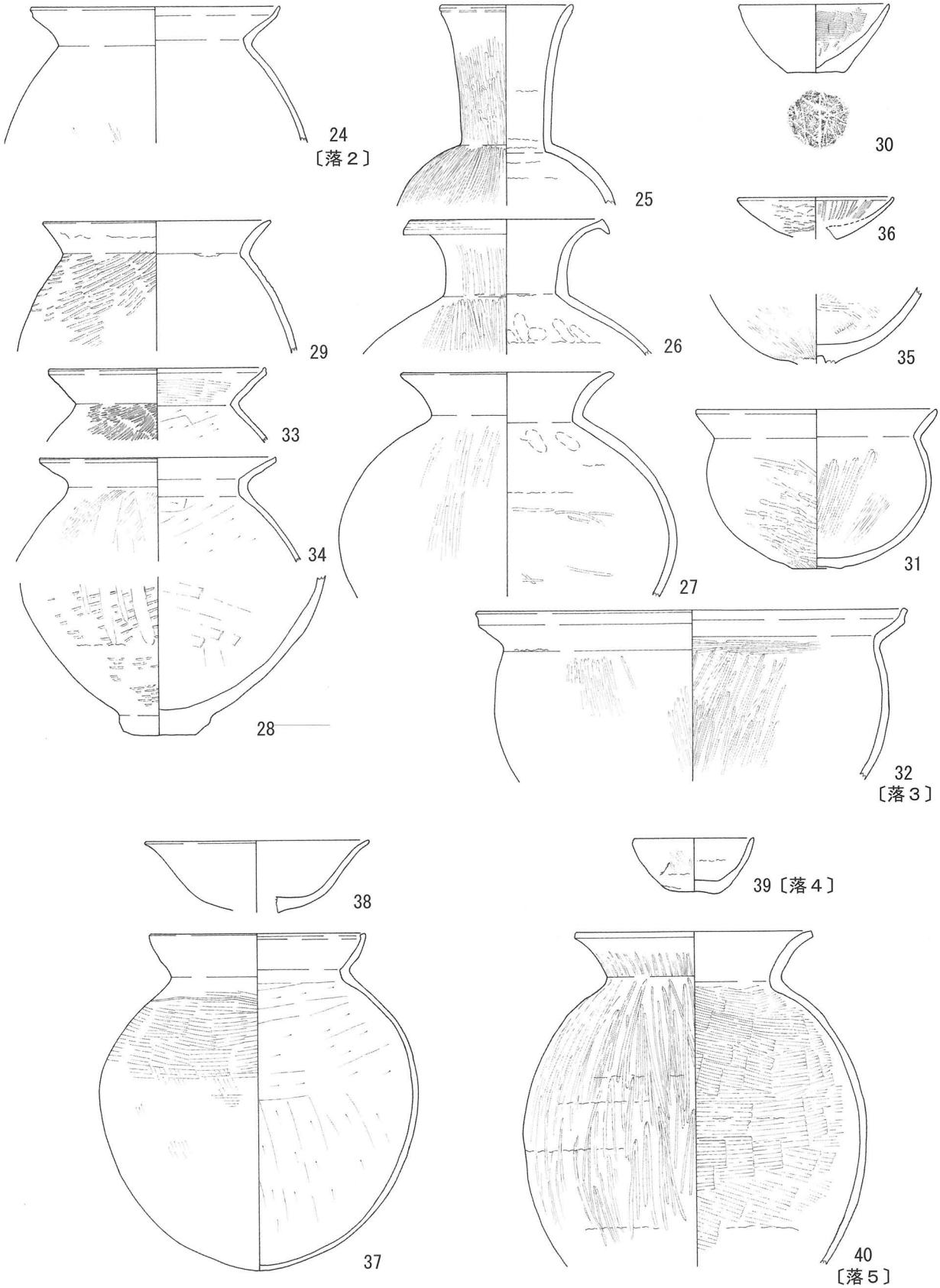


図７　落込み01出土遺物実測図②

表５　落込み01出土遺物

遺物番号	出土遺構層位	種類器種	残存度（残存部分）	計測値（cm）	調整・文様等	色調	備考
6	落込み01 落１上部	古式土師器 壺	口縁部の3/4を欠く	口径(15.8) 器高32.6 底径4.5	口縁部：横ナデ、体部外面上半：斜め方向のヘラミガキ、体部外面下半：ナデ(タタキ目が残る)、内面：板ナデ	7.5YR7/3にぶい橙色	体部外面に黒斑
7	落込み01 落１上部	古式土師器 壺	口縁～肩部	口径16.4	口縁部：横ナデ、肩部外面：タタキ、肩部内面：板ナデ	外：7.5YR6/3にぶい褐色 内：10YR6/3.5にぶい黄橙色	
8	落込み01 落１上部	古式土師器 壺	体部下半～底部		外面：右上がりのタタキ後ナデ、内面：板ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	７と同一個体
9	落込み01 落１下部	古式土師器 壺	口縁部の1/2・体部の一部を欠く	口径(15.4) 器高25.1	口縁部：横ナデ、肩部外面,ナデ(ハケ目残る),体部内面下半：ヘラケズリ、他：ナデ	10YR6/3にぶい黄橙色	体部外面に黒斑
10	落込み01 落１下部	古式土師器 小型壺	口縁部の2/3・体部の一部を欠く	口径(8.1) 器高7.8 底径0.9	口縁部：横ナデ、体部外面：斜方向のヘラミガキ、内面：ナデ、削り出しにより底部を作る	7.5YR8/3浅黄橙色	体部外面に黒斑
11	落込み01 落１	古式土師器 小型丸底壺	口縁部の2/3・体部上半の1/2を欠く	口径(9.4) 器高7.6	口縁部：ヨコナデ、体部外面;ヘラケズリ、体部内面：ナデ	5YR6.5/6橙色(外：一部5YR8/3淡橙色)	
12	落込み01 落１上部	古式土師器 甕	口縁部～体部上半の1/2	口径(13.2)	口縁部外面：横ナデ、体部外面：ハケ調整、口縁部内面：ハケ調整後端部を横ナデ、肩部内面：ヘラケズリ	7.5YR8/3浅黄橙色	外面に煤
13	落込み01 落１下部	古式土師器 甕	口縁部の1/2、体部～底部の1/3	口径(15.7) 器高18.3	口縁部：横ナデ、体部外面：右上りのタタキ後下半にハケ調整、体部内面：ヘラケズリ後上半にハケ調整・ナデ	7.5YR5.5/2灰褐色	体部外面下半に煤、内面に焦げ
14	落込み01 落１下部	古式土師器 高杯	杯部・裾部の1/3を欠く	口径16.0 器高13.0 脚底径12.0	口縁端部～体部内面：横ナデ、口縁部外面：横方向のヘラミガキ、体部外面：ヘラケズリ、他：ナデ	7.5YR7/4にぶい橙色	
15	落込み01 落１下部	古式土師器 高杯	裾部の1/3を欠く	口径16.4 器高13.0 脚底径12.0	口縁端：横ナデ、口縁部内面・脚部外面：横方向のヘラミガキ、体部外面：ヘラケズリ、他：ナデ	7.5YR7/4にぶい橙色	
16	落込み01 落１上部	古式土師器 高杯	完形	口径15.4器高11.5脚底径10.5	口縁部：横ナデ、体部外面：ヘラケズリ後ナデ、柱状部外面：板ナデ、杯部内底面：ヘラミガキ、他：ナデ	内：5YR7/4にぶい橙色 外：7.5YR8/3浅黄橙色	裾部内面に黒斑
17	落込み01 落１下部土器群	Ｖ様式系 甕	口縁部～肩部の1/5	口径(15.0)	口縁部：横ナデ、肩部外面：右上がりのタタキ、肩部内面：ナデ	7.5YR7/3にぶい橙色	
18	落込み01 落１下部土器群	古式土師器 甕	口縁部～肩部の1/6	口径(15.4)	口縁部～肩部上端：横ナデ、肩部外面：ハケ調整、肩部内面：ヘラケズリ	10YR5.5/2灰黄褐色	
19	落込み01 落１下部土器群	古式土師器 甕	口縁部～肩部の1/4	口径(14.2)	口縁部・肩部外面：横ナデ、体部：ハケ調整、体部内面：ヘラケズリ	7.5YR7/3にぶい橙色	口縁部外面に煤
20	落込み01 落１下部土器群	古式土師器 小型甕	口縁部～体部上半の1/4	口径(12.7)	口縁部：横ナデ、体部外面：ハケ調整、体部内面：ヘラケズリ	7.5YR5/2灰褐色	外面に煤
21	落込み01 落１下部土器群	古式土師器 甕	体部上半、体部下半～底部の1/2	体部最大径(18.1)	外面：水平方向のタタキ後体部下半を縦方向のハケ調整、内面：ナデ、尖り底	外：5YR6/6橙色 内：5YR6.5/4にぶい黄橙色	製塩土器か
22	落込み01 落１下部土器群	古式土師器 高杯	裾部を欠く	口径10.8	口縁部・杯部内面：横方向のヘラミガキ,杯部：ケズリ,	5YR6.5/6橙色	
23	落込み01 落１下部土器群	古式土師器 高杯	裾部の1/4	脚底径(20.0)	外面：ハケ調整後ナデ、端部内面：横ナデ、内面：ハケ調整、円形(1.2cm)の透孔１個残存	10YR7/2.5にぶい黄橙色	
24	落込み01 落２	古式土師器 甕	口縁部～体部上半の1/3	口径(17.0)	体部上半下端：ハケ調整、他：表面磨耗のため調整不明	外：7.5YR5.5/4にぶい褐色 内：10YR4/1褐灰色	
25	落込み01 落３	弥生土器 長頸壺	口縁部の1/2、頸部、肩部の1/2	口径(9.0)	口縁部：横ナデ、外面：縦方向のヘラミガキ、内面：ナデ	10YR6/3にぶい黄橙色(外：一部5YR6/4にぶい橙色)	体部外面に黒斑
26	落込み01 落３	弥生土器 広口壺	口縁部の1/4・肩部～体部上端の1/3	口径(13.2)	口縁部：横ナデ、頸部～体部外面：縦方向のヘラミガキ、頸部～体部内面：ナデ	10YR5.5/2灰黄褐色	体部外面に黒斑
27	落込み01 落３	弥生土器 広口壺	口縁部の一部、体部上半の1/2	口径(14.2)	体部外面：縦方向のヘラミガキ、体部内面：ナデ後部分的に横方向のヘラミガキ、他：表面磨耗のため不明	外：7.5YR7/3.5にぶい橙色(一部2.5YR6/6橙色) 内：2.5YR6/6橙色	
28	落込み01 落３	弥生土器壺	体部下半～底部	底径5.0	外面：右上がりのタタキ後ナデ、内面：ナデ	外：7.5YR6/2灰褐色 内：10YR6/1褐灰色	底部外面に黒斑
29	落込み01 落３	弥生土器 甕	口縁部～肩部	口径(15.6)	口縁部：ヨコナデ、肩部外面：右上がりのタタキ、肩部内面：ナデ	外：10YR7/2にぶい黄橙色 内：7.5YR8/3浅黄橙色	肩部外面に煤
30	落込み01 落３	弥生土器 小型鉢	口縁部の大部分と体部の一部を欠く	口径(10.2) 器高4.7 底径3.8	外面：ナデ、内面：ハケ調整、底面に木葉痕	10YR7/3にぶい黄橙色	
31	落込み01 落３	弥生土器 鉢	口縁部～体部の一部、底部	口径(16.4) 器高11.0 底径3.2	口縁部：横ナデ、外面：ハケ調整後斜め方向のヘラミガキ、内面：縦方向のヘラミガキ	7.5YR7/4にぶい橙色(一部2YR6/6橙色)	
32	落込み01 落３	弥生土器 鉢	口縁部～体部上半の1/3	口径(29.2)	口縁部：横ナデ、体部外面：縦方向のヘラミガキ、体部内面上端：横方向のヘラミガキ、内面にハケ目残る	10YR5/2灰黄褐色	吉備系か
33	落込み01 落３	古式土師器 甕	口縁部～肩部の3/4	口径14.8	口縁部外面：横ナデ、口縁部内面：横方向のハケ調整、肩部外面：右上がりのタタキ、肩部内面：ヘラケズリ	10YR6/2灰黄褐色	
34	落込み01 落３	古式土師器 甕	口縁部～肩部の1/5	口径(16.2)	口縁部～肩部上端：ヨコナデ、肩部外面：ハケ調整、肩部内面：ヘラケズリ	10YR6/2灰黄褐色	18と同一固体
35	落込み01 落３	古式土師器 高杯	杯部、口縁部・体部の1/3を欠く		外面：縦方向のハケ調整、内面：ハケ調整後ヨコナデ	外：7.5YR6/1褐灰色 内：10YR6.5/3にぶい黄橙色	二次焼成
36	落込み01 落３	古式土師器 小型器台	杯部、口縁部の3/4を欠く	口径(10.6)	外面：横方向のヘラミガキ、内面：放射状のヘラミガキ	外：10YR7/2にぶい黄褐色 内：10YR7/3にぶい黄褐色	
37	落込み01 落１と落４の間	古式土師器 甕	口縁部、体部～底部の1/2	口径14.6 器高23.4	口縁部：横ナデ、体部上半外面：横方向のハケ調整、体部下半外面：斜め方向のハケ調整、内面：ヘラケズリ	10YR7/2にぶい黄橙色	外面に黒斑
38	落込み01 落１と落４の間	古式土師器 高杯	杯部の3/4	口径15.2	内外面：横ナデ	5YR8/4淡橙色(外：一部2.5YR7/6橙色)	
39	落込み01 落４上部	ミニチュア土器 鉢	完形	口径8.0 器高3.8 底径3.0	口縁部：横ナデ、他：-ナデ、外面にハケ目残る	10YR5.5/2灰黄褐色	体部外面に黒斑
40	落込み01 落５	弥生土器 広口壺	口縁部～体部下半の1/3	口径(16.0)	口縁部：横ナデ、頸部～体部外面：縦方向のヘラミガキ、口縁部内面：横方向のヘラミガキ、体部内面：横方向のハケ調整	7.5YR7/3にぶい橙色	

た古式土師器のうち、①(図４－落１)から出土した古式土師器10点(６～16)、①の下部に帰属する土器群から出土した古式土師器７点(17～23)、②の上部(同－落２)から出土した古式土師器１点(24)、②の下部(同－落３)から出土した弥生土器８点(25～32)・古式土師器４点(33～36)、①と③の間に堆積する粘質土から出土した古式土師器２点(37・38)、③の上部(同－落４)から出土したミニチュア土器１点(39)、③の下部(同－落５)から出土した弥生土器１点(40)を図化した。②の下部(同－落３)から出土した土器は、古墳時代前期後半までのものであるが、大半は弥生土器である。なぜ、古墳時代前期後半までの土器を含みながらも弥生土器が大半を占めるのかは不明であるが、二次的な埋積であることは間違いない。

時期　出土遺物から、古墳時代前期後半に埋没河川を溝状に掘削することにより形成され、古墳時代前期後半の間に数次に亘る掘削、流水・人為による埋没がなされたと考えられる。

・遺構に伴わない出土遺物

遺構に伴わない出土遺物は、主に７層・８層から出土している。**落込み01**の基盤層（図３－15層、図４－基１～基４）と**落込み01**埋土の下位層である河川堆積物（図４－河１～河４）からは、人工遺物は出土していない。６層より上位の地層での人工遺物の出土は確認されなかった。以下に、７層・８層の出土遺物について記す。

７層出土遺物（図７、表６、図版八）

７層からは、弥生土器(中期以降)・古式土師器・土師器・須恵器が出土している。このうち古式土師器１点(42)・土師器１点(41)を図化した。41は、ての字口縁を持つ土師器皿で、時期を比

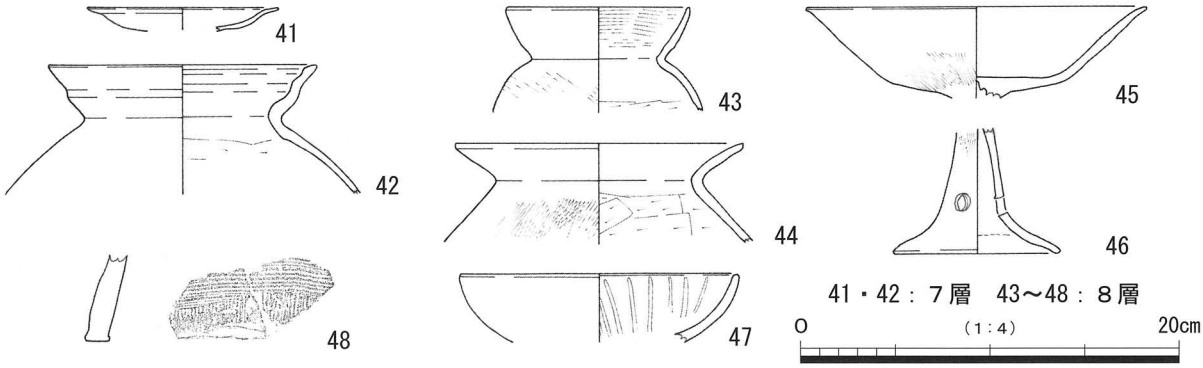


図８　遺構に伴わない出土遺物実測図

表６　遺構に伴わない出土遺物

遺物番号	出土遺構層位	種類器種	残存度(残存部分)	計測値(cm)	調整・文様等	色調	備考
41	７層	土師器皿	1/5	口径(10.0)器高1.2	口縁部外面：横ナデ、他：表面磨耗のため不明	10YR8/1灰白色	ての字口縁
42	７層	古式土師器壺	口縁部～体部上端の1/3	口径(14.0)	口縁部：横ナデ、体部外面：ナデ、体部内面：ヘラケズリ	5YR8/3.5淡橙色	
43	８層	古式土師器小型甕	口縁部～肩部の1/3	口径(9.6)	口縁部外面･肩部内面上端：横ナデ、口縁部外面：ハケ調整後ナデ,肩部外面：ハケ調整、肩部内面下端：ヘラケズリ	外：5YR6.5/4にぶい橙色 内：5YR6/6橙色	
44	８層	古式土師器甕	口縁部～肩部の1/5	口径(15.2)	口縁部～肩部上端：横ナデ、肩部外面：ハケ調整、肩部内面：ヘラケズリ	10YR6/3にぶい黄橙色	
45	８層	古式土師器高杯	杯部、口縁部･体部の1/5を欠く	口径(17.8)	外面：縦方向のハケ調整、他：表面磨耗のため調整不明	外：5YR7/4にぶい橙色 内：5YR7/6橙色	
46	８層	古式土師器高杯	脚部	脚底径8.6	外面：ナデ（柱状部上端に縦方向のハケ目残る)、）内面：ナデ、柱状部下端に円形(径８㎜)の三方透孔	５YR6.5/6橙色	
47	８層	土師器杯	口縁部の1/2、体部の一部	口径(14.6)	口縁部：横ナデ、体部外面：ナデ、内面：横ナデ後放射状暗文	7.5YR8/4浅黄橙色	内外面に煤
48	８層	埴輪円筒形	基底部の1/9		外面：縦方向のハケ調整後横方向のハケ調整、内面：ナデ	外：5YR6/4にぶい橙色 内：7.5YR6/1	窖窯焼成

定できるものの中では最も新しいものである。７層は、出土遺物から、平安時代中期（10世紀後半）以降の堆積層と考えられる。

８層出土遺物（図７、表６、図版九）

８層からは、弥生土器（後期）・古式土師器・土師器・須恵器・埴輪が出土している。このうち古式土師器４点（43～46）・土師器１点（47）・埴輪１点（48）を図化した。８層出土遺物のうち、最も新しいものは47である。８層は、出土遺物から、飛鳥時代後期（７世紀後半）以降の堆積層と考えられる。

３．まとめ

今回の調査では、古墳時代前期後半の溝状の落込み１箇所（**落込み01**）と古墳時代中期前半の溝１条（**溝01**）を検出した。**落込み01**は一つの遺構として扱ったが、埋土断面の観察から、数次に亘る溝の開削が行われたことがわかる。**溝01**を含めて、古墳時代前期後半から中期前半にかけて、継続的に南東－北西方向に溝が開削されたことが窺える。

南東約150ｍの本郷遺跡の調査（図１・表１－29）で、古墳時代前期から中期にかけての大溝が４条検出されている（北野 1993）。これらの大溝のうち、直線的に伸びる２条は南東－北西方向に伸びており、今回の調査で検出された**落込み01**・**溝01**の方向と一致する。**落込み01**・**溝01**が、本郷遺跡で検出された大溝と同一の溝であるかどうかは断定できないが、関連性があるものと考えられる。本郷遺跡では、大溝の稼動していた時期の竪穴住居が検出されており、「集落を囲む環濠の可能性」が指摘されている（北野 1993）。

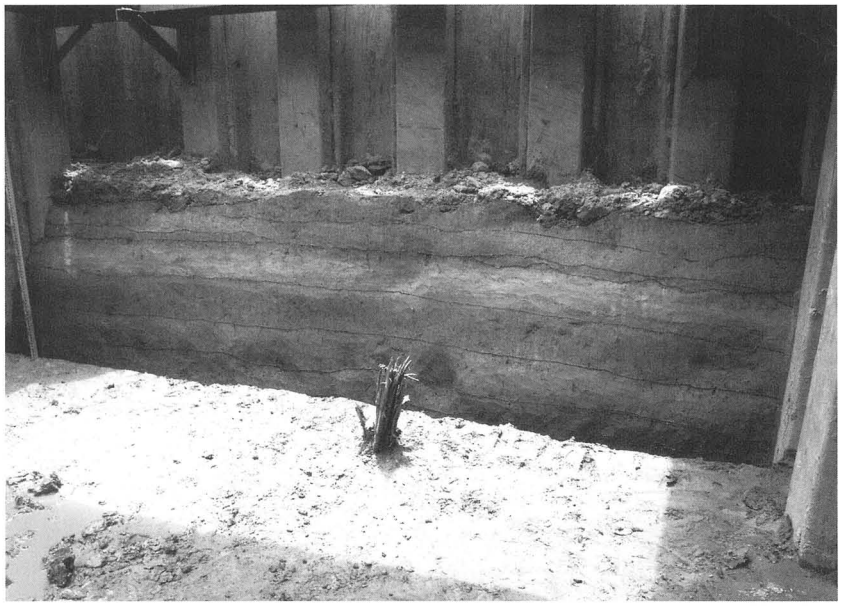
今回の調査区では、**落込み01**・**溝01**の埋土から、土器を主体とする遺物が多く出土しており、**落込み01**の埋土上層からは、完形に近いものや残存率の高い土器が出土している。このことから今回の調査区も集落の縁辺に当たると考えられ、**落込み01**・**溝01**は集落の縁辺に廻らされた溝であったと推定される。

参考文献

・北野　重　1993　『本郷遺跡 1991・1992年度』柏原市文化財概報 1992－Ⅲ

図版一

調査地全景（南西から）

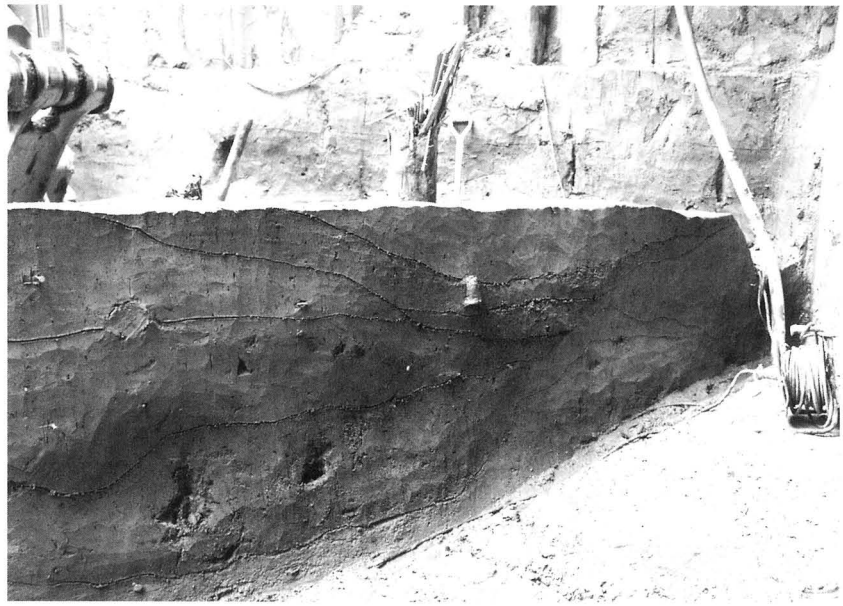


南壁沿い地層上部（北から）

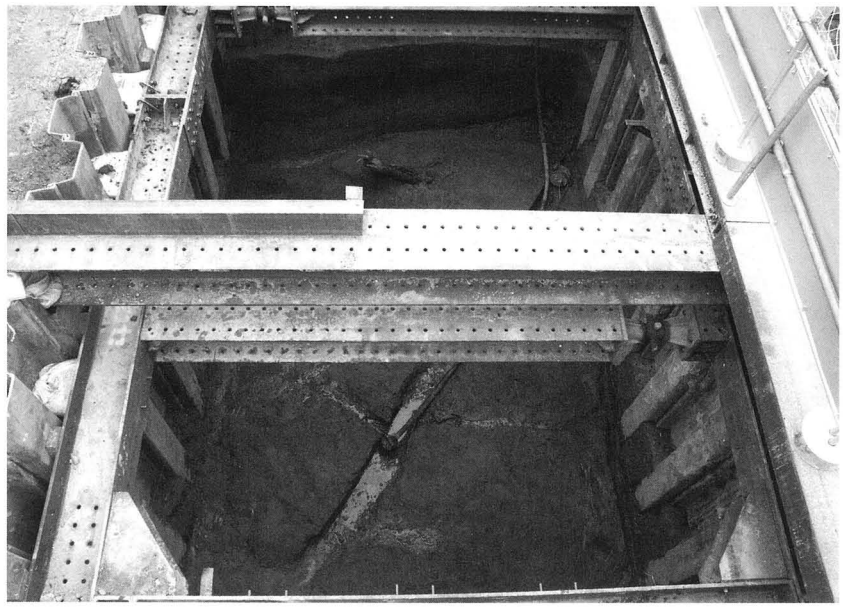
南壁沿い地層下部（北東から）

図版二

溝01（北東から）



溝01埋土（北から）



落込み01（北東から）

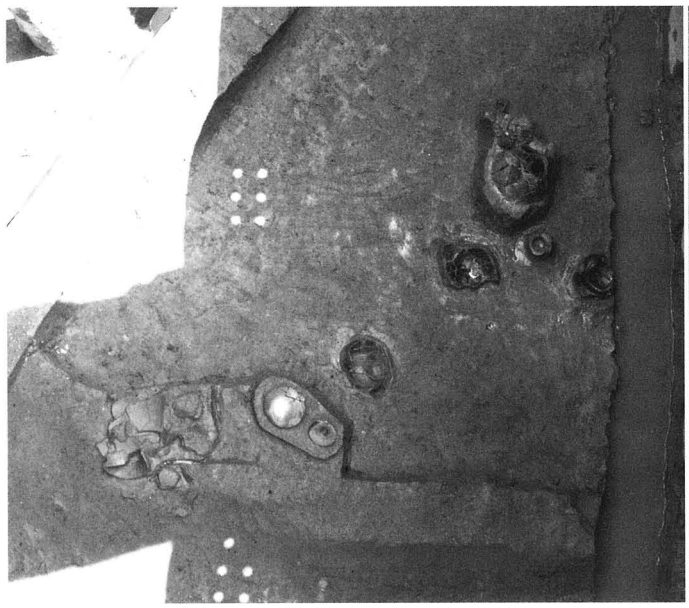
図版三

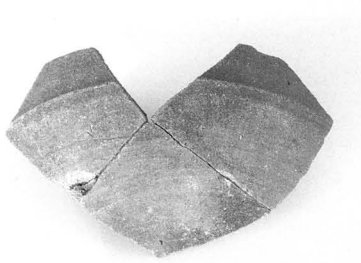
右上：落込み01北部埋土
（南西から）

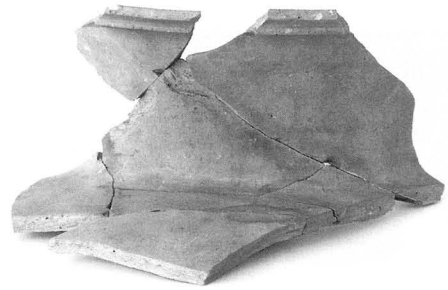
右中：落込み01南部埋土
（北から）

左下：落込み01［落１］内
遺物出土状況
（調査区中央部、上が北東）

右下：落込み01［落１］内
遺物出土状況
（調査区北部、南東から）



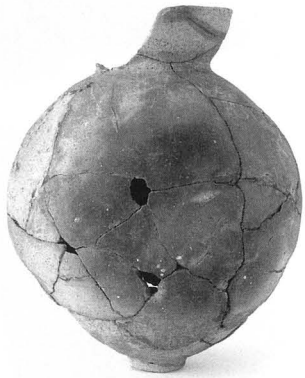

1


2

3

4

5

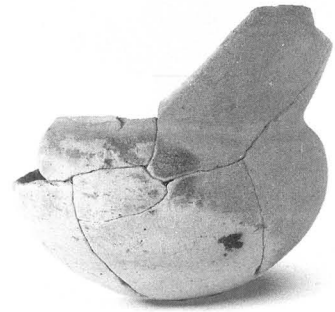

6

9

7

10

8


11

溝01（１～５）、落込み01（落１：６～11）出土遺物

図版五

12

13

14

17

18

15

19

16

20

落込み01(落１:12～16、落１土器群:17～20)出土遺物

21

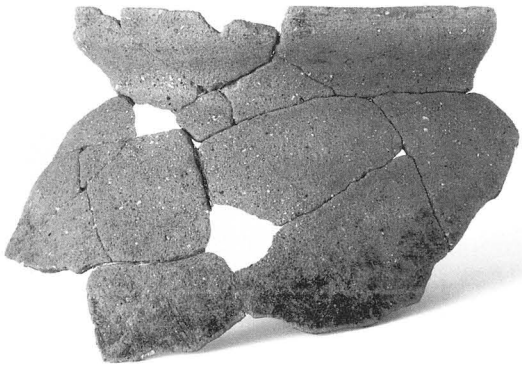
25

22

26

23

27

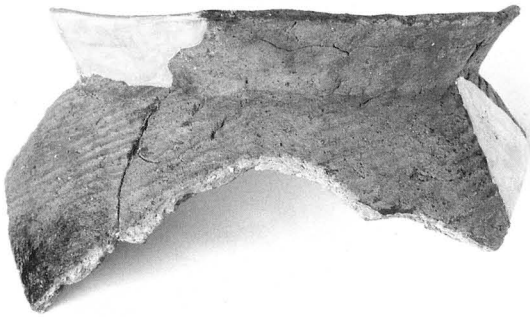


24

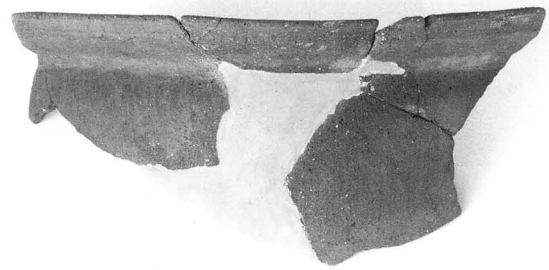
28

落込み01（落１土器群：21～23、落２：24、落３：25～28）出土遺物

図版七



29

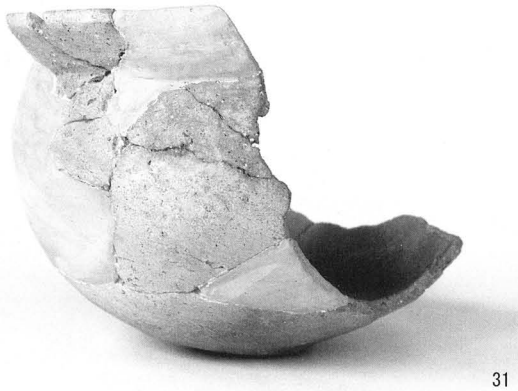


32

33

30

34

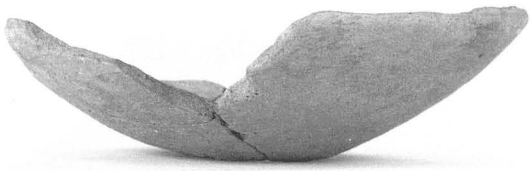


31

35

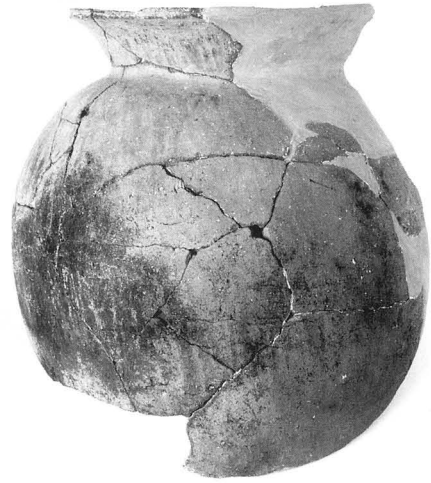
落込み01（落３：29～35）出土遺物

図版八



39

36



40

37

41

38

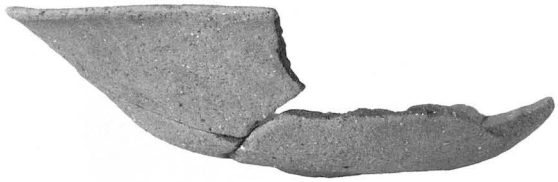
42

落込み01（落３：36、落１と落３の間の粘質土：37・38、落５：40）、７層（41・42）出土遺物

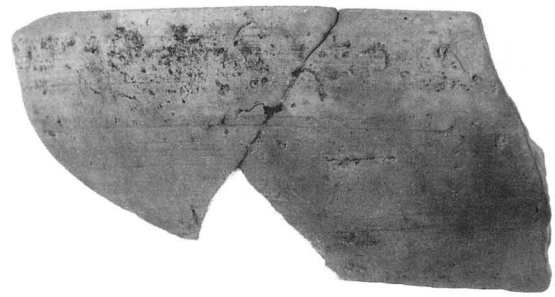
図版九

43

44



45



47

46

48

8層(43～48)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく112
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告112
副書名	Ⅰ　大竹西遺跡(第５次調査)　Ⅱ　木の本遺跡(第14次調査)　Ⅲ　木の本遺跡(第15次調査) Ⅳ　山賀遺跡(第13次調査)　Ⅴ　弓削遺跡(第７次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	112
編著者名	Ⅰ・Ⅱ成海佳子　Ⅲ・Ⅴ　荒川和哉　Ⅳ西村公助　荒川
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2008年３月31日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
大竹西遺跡(おおたけにしいせき) (第５次調査)	大阪府八尾市上尾町七丁目地内(おおさかふやおしかみおちょう7ちょうめちない)	27212	54	34度38分22秒	135度37分51秒	20070612～0807	約44	公共下水道
木の本遺跡(きのもといせき) (第14次調査)	大阪府八尾市木の本一丁目(おおさかふやおしきのもと1ちょうめ)、南木の本七丁目地内(みなみきのもと7ちょうめちない)	27212	35	34度35分53秒	135度35分21秒	20070125～0131	約23	公共下水道
木の本遺跡(きのもといせき) (第15次調査)	大阪府八尾市南木の本九丁目地内(おおさかふやおしみなみきのもと9ちょうめちない)	27212	35	34度36分06秒	135度35分35秒	20070219～0221	約49.5	公共下水道
山賀遺跡(やまがいせき) (第13次調査)	大阪府八尾市山賀町一・三丁目地内(おおさかふやおしやまがちょう1・3ちょうめちない)	27212	32	34度38分40秒	135度36分06秒	20070402～0524	約51.52	公共下水道
弓削遺跡(ゆげいせき) (第７次調査)	大阪府八尾市弓削町二丁目・志紀町南四丁目地内(おおさかふやおしゆげちょう2ちょうめ・しきちょうみなみ4ちょうめちない)	27212	71	34度35分36秒	135度36分47秒	20070604～0619	約33.4	公共下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大竹西遺跡 (第５次調査)	集落	縄文時代晩期 弥生時代中期～後期 平安～鎌倉時代	地層 河川堆積 耕作土	－	
木の本遺跡 (第14次調査)	集落	平安時代末～中世 近世	河川堆積	－	
木の本遺跡 (第15次調査)	集落	平安時代	耕作土	－	
山賀遺跡 (第13次調査)	集落	弥生時代中期以降 古墳時代後期以降	河川堆積 耕作土	須恵器	
弓削遺跡 (第７次調査)	集落	古墳時代前期後半 古墳時代中期前半	落込み 溝	古式土師器 土師器　須恵器	

要約	大竹西遺跡第５次調査では、縄文時代晩期に相当する黒灰色粘土質シルト層を確認した。この層は、周囲の調査でも確認しており、広範囲にわたって堆積している結果を得た。また、弥生時代中期から後期の河川堆積と平安～鎌倉時代の耕作土も確認した。木の本遺跡第14次調査では、平安時代末～中世と近世の河川堆積を確認した。堆積の状況から当調査地は、河川～湿地の状態を繰り返していたことが判明した。木の本遺跡第15次調査では、平安時代の耕作土を確認した。この地層は、周囲の調査でも確認しており、一帯に水田あるいは畑に伴う耕作土が広がっていたと推測できる。山賀遺跡13次調査では弥生時代中期以降の河川堆積と古墳時代後期以降の耕作土を確認した。弓削遺跡第７次では古墳時代前期から中期にかけての落込みと溝を確認した。これらの遺構は周囲の調査結果から、集落の縁辺に廻らされた遺構であったと推測される。

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告112

Ⅰ　大竹西遺跡（第５次調査）

Ⅱ　木の本遺跡（第14次調査）

Ⅲ　木の本遺跡（第15次調査）

Ⅳ　山賀遺跡（第13次調査）

Ⅴ　弓削遺跡（第７次調査）

発　行　平成20年３月

編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　<260Kg>
本　文　ニューエイジ　< 70Kg>
図　版　ニューエイジ　< 70Kg>